

雨なふりそねは、雨勿降のなふりそに、ねを添へたので、ねは乞ひねがふ意の助辭。

同じ作者の新に、「おくれるて我が戀ひをれば白雲のたなびく山を今日かこゆらむ」といふのがある。いづれも、優しい妻の心づかひが、あらはれてゐる。

神風の伊勢の濱萩をりふせて旅寝やすらむ荒き濱邊に

(卷四、碁檀越妻 五〇〇)

伊勢の國へ旅立つた夫を思ひやつて詠んだもの。伊勢の海邊に生ふる萩を折り敷いて、波風の荒い濱邊に、わびしい旅寝をし給ふことであらうか。

やさしい妻の情が、言外に溢れてゐる歌。

はま萩は、濱邊に生ふる萩で、蘆の類である。伊勢にては、蘆のことを濱萩といふのであるといふのは、この歌によつて後人のいひ出でた假説である。

以下は、ある特殊な場合に詠んだ歌を掲げる。

我はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり

(卷二、藤原鎌足 九五)

嬉しいことかな、自分は安見兒を得た。人々の競つてわがものとしようとしてしかも何人もわが物とし得ずにくた、美しい采女の安見兒を、たうとう得ることが出来た。

もやは、もよといふに同じく、感嘆の助詞、安見兒は采女の名。采女は、後宮で、御膳のことにあづかるもの。諸國の郡の少領以上の姉、妹、女の、容姿端正なるものより采られたのである。

五七對五七七と組立てて、同じ句を繰返した、萬葉に獨特の力強い句法で、歡喜の情が、一首のうちに充ち切つてゐる。

「うち日さす宮にゆく子をまがなしみとむれば苦しやればすべなし

(卷四、大伴宿奈磨 五三二)

宮仕へすとて、都へ出て行くこの少女が可愛いので、留めたいとは思ふが、留めおくことは苦しい。さうかといつて、都へやるのは氣がかりでならない。何としたらよいものであらう。

少女は、地方の郡司などの娘で、采女となつて都に出るのであらう。しかして作者は地方官として、かねて此の少女を知つてゐたのである。それ故に、上官としては留めおくこともしがたく、遠く都へやるのも忍びないといふ、苦しい境地に陥つたのである。上三句は、やはらかなうつくしい感じで、下二句は切なる情があふれてゐる。

人皆は今長しとたけといへど君が見し髪亂れたりとも

(卷二、園生羽女 一二四)

女は三方沙彌の妻となつたが、まもなく沙彌が病に臥し、久しく相見るをえず思ひに堪へで、沙彌が病床で詠んで贈つた歌、「たけばぬれたかねば長き妹が髪此頃見ぬにかきれつらむか」、(かきあげればぬるぬるとけすべり、かきあげねば長かつた美しい髪も、この頃見ぬうちに、かき入れたかしらん、戀しく思はれる)といふに答へたのである。まう長くなつたから、髪上けをせよと皆人はいふが、君に見えそめたその時のさまを、私にかへまいとて、よしや亂るゝともそのまゝにしてありますと、初々しくまた美しい若い婦人の情の、なつかしく感ぜられる作である。

人言をしけみこちたみおのが世に未だわたらぬ朝川渡る

(卷二、但馬皇女 一一六)

ひそかな戀の歡樂に酔つたのも束の間、たちまち世間の口のはにのほつてあらはれた爲に、身に習はぬさまさまの憂きことや、苦しいことを經驗することとなり、はてはかく、生れてから初めて、朝早く川を渡つたりすることである。戀はまことに苦しいものである。

こちたみは、言痛みで、仰山にいはれるのがつらさにの意。朝川は朝の川で、かく助辭を省いて、實語を連ねるのは、萬葉の修辭の一つの特色である。

天武帝の皇女なる作者が、穗積皇子との戀があらはれた時の作。

「梓弓」末は知らねどうつくしみ君にたぐひて山路越えきぬ

(卷十二、作者不詳 三一四九)

末はどうなることか、もしかしたらば捨てられるかも知らないが、君のいとしさに、君について、一諸に山路をも遠く越えて來たことである。

思ふ男の地方の任國に下るに従ひゆく女などの、不安な情を詠んだものであらう。「うつくしみ」は、いとほしいによつて、「たぐひて」は副つての意。

出でて去なば天飛ぶ雁のなきぬべみ今日今日といふに年ぞ經にける

(卷十、作者不詳 二二六六)

出て行つたならば、雁の鳴くやうに、この人も泣くであらうと思つて、今日今日と猶豫してゐるうちに年を経てしまつた。

配偶者に満足しはしないけれども、流石に馴れてしまつては、その人の歎かんとし哀であつて、思ひ切つて、別れることも出來ない。いつの世にもある、その日その日を暮して行つた人情を歌つた作。

大き海の水底ふかく思ひつつ裳ひき馴らし菅原の里

(卷二十、石川女郎 四四九一)

藤原宿奈磨の妻なる作者が、夫の愛衰へて、離別の身となつた後に、そのかみを思ひ出して、悲しみに堪へて詠んだ作である。

かく人の心の變りはてようとも知らで、大海の底のやうに、深くも頼みかはしながら、かの菅原の里を、衣のすそを長くひいて、心長閑に行き通つたものを、かういふ運命にならうとは、頼みがたい人心かな。

四五の句が、一種の美しい情趣を、ただよはしてゐる。

商變あきかはりしらすとの御法みのりあらばこそ吾が下ごろも返し給はめ

(卷十六、作者不詳 三八〇九)

純なうつくしい戀の歌の多い中に、理屈ばつた戀の恨みの歌一首を採録する。

あるよい人に愛されてゐた女が、その愛が衰へた後、かつて贈つた下衣を返されたのを恨み腹立つて贈つた歌であるといふことが、歌の註に記し添へてある。

物と價とを定めて取交した品を、變更へんがへして返してもよいといふ法令が出たのであるならばこそ、私の差上げた下衣を、返してもいただきませう。あまりにひどいではございませぬか。

愛の保證として贈つた衣を、愛の薄くなつた爲に、返却されたのである。その恨めしさ悔しさはどんなであつたらう。綿々として盡きぬ怨恨が、一首にこめられてゐる。

以下九首は、中臣宅守が、狭野茅上娘子とあつた爲に罪を得て、越前に流された。その二人の贈答の哀歌の一部である。

君が行く道の長手をくりたたみ焼き滅ほさむ天あめの火もがも

(卷十五、狭野茅上娘子 三七二四)

自分との戀の爲に罪を得て、遠く越前の國へ流されてゆき給ふ悲しさよ。いか

でその君が行く遠い長い道をくりたゝんで、一束ねとして一度に焼いてしまふ天の火もあれかし。さうすれば、あなたと自分は、やはり一つ所に住まへるであらうものを。

中臣宅守なかのみんに贈つたのである。まこと、天の火のやうな情熱にもえた作である。長手は長い距離で、長い道のこと。

畏おそこみとのらすありしをみ越路の峠たせびに立ちて妹が名のりつ

(同 中臣宅守 三七三〇)

宅守が流されて、越路に入つた時の作。

罪を得てかくは流されてゆく身であるから、恐れ多さに、戀しい思などは一言も洩さずに長い旅を來たが、いよく越路に入つて、有乳山あいらの峠に立つた時は、たうとう堪へがたくなつて、戀人の名を口に出して呼んだことであるの意。かの、

日本武尊の「あづまはや」とのたまうたことも思ひ合される。

たむけは、山の峠で、山の神にぬさをたむけたから起つた名である。

あはむ日をその日と知らずとこやみにいづれの日まであれ戀ひをらむ

(同 上 三七四二)

配流の身の、いつゆるされて都へ歸れるともわからぬ。いつ御身とも逢へるかわからぬ。何等の曙光を認められない常闇とこやみのやうな思のうちに、いつの日まで、かくは戀ひ苦しんでをることであらう。

常闇の一句が、極めて適切である。

他國ひとくにに君をいましていつまでか我がこひをらむ時の知らなく

(同 狭野茅上娘子 三七四九)

遠い他國にあなたをやつて、かくはいつまで戀ひなやむことであらう。思へば

いつになつたらば、再會の機があるか、果しも知らない事である。たよりを得て、越前の配所なる戀人のもとに贈つた作。

過所くわそなしに關とびこゆる杜宇わが身にもがもやます通はむ

(同 中臣宅守 三七五四)

過所は關所を通りこえる手形で、くわそと音讀したのである。手形もなく、自由に関所をこえてゆく杜宇の身が羨ましい。杜宇であつたならば、たえまなく、故郷の戀人のもとに通はうものを。罪を得てかく遠く流されて來た身の、何事も思ふにまかせず、ただ空しく鳥を羨むばかりである。

過所なしには、特に配流の身であるから言つたのである。

「さす竹の」大宮人は今もかも人なぶりのみ好みたるらむ

(同 上 三七五八)

大宮人は、今もやはり、人をからかひなぶるのを喜んで、自分のおもひ人に対しても、自分がかの人の怨にかく罪を得て、流されたことについて、彼女の心をも知らないで、様々にからかつてゐることであらう。

京なる茅上娘子の上を思ひやつて詠んだのである。

魂たましひはあした夕べに魂ふれどわが胸いたし戀のしけきに

(同 狭野茅上娘子 三七六七)

わが魂をば、朝に夕べに鎮魂の祈禱をして、おし鎮めてゐるけれど、何の甲斐もなく、切ない戀しさは止まないで、胸の痛みが留まるべくもない。

たまふれどは、鎮魂祭をなして、魂を胸に鎮めるといふ義。惱みや苦しみがあると、魂が胸におちつかないで、うかれ出るといふ考から、神に祈つて、それをふり靜めるといふのが、鎮魂祭の主旨である。されば、鎮魂のことを、みたまふり

とも言つたのである。

歸りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて

(同 上 三七七二)

大赦があつて、流人が許されて歸つて來たと聞いたので、さては吾が戀人も許されて歸つたのであるかと思つて、餘りの嬉しさに、殆ど氣絶をするやうに思つた。しかし、なさけないかな、君は歸り給はぬことである。

「ほと／＼死にき君かと思ひて」喜ばしさに胸がをどつた切なる感情の響が、強い音をたててゐる。

心なき鳥にぞありける時鳥もの思ふ時に鳴くべきものが

(同 中臣宅守 三七八四)

いつ歸られるものとも分らない配流の身の心には、常に故郷のおもひ人の上が

思はれて、様々の思ひに苦しんでゐるのに、聲をたてて徒らに人の思を増さしめるとは、けに心なき鳥ではある。汝ほと／＼ぎすよと、杜宇に呼びかけたのである。

四五の句、殊に、なくべきものかと罵つたのは、力強い調子である。同時の作に『戀死なば戀ひも死ねとや杜宇もの思ふ時に來なき響むる』及び、『ほととぎす間暫しおけ汝が鳴けば吾が思ふ心いたもすべなし』といふのがある。

以下、長歌五篇を載せて、この章をとちめる。

みよし野の耳我の嶺に 時なくぞ雪は降りける

間なくぞ雨は降りける 其の雪の時なきがごと

その雨の間なきがごと 隈もおちす思ひつゝぞくる

その山みちを (卷一、天武天皇 二五)

吉野なる耳我の嶺は高いので、雪はやむ時なく降り、雨は絶間なくふる。その

降つてゐる雪のやむ時のない如く、その降りそそぐ雨の絶間のないやうに、この道の隈々を曲り曲りつつも、戀人のことを思ひつづけてくることである、その険しい山みちを。

大海人皇子と申して吉野の宮にいました頃、戀人をおほしての作であらう。壬申の亂の英雄にも、かういふ心の悩みがあつたのである。

かく戀の歌とする説と、皇太子を辭して吉野に入り給うた時の作と解する説とある。「隈もおちず」は、道のまがりかどの隈々も洩らさずの意で、道程の長さをあらはした句である。

「百しね」美濃の國の

高北の泳の宮に

月に日に行かまし里を

ありときゝて我が通路の

お木曾山美濃の山

靡けと人はふめども

かくよれと人は衝けども

こころなき山の

おぎそ山みぬの山

(卷十三、作者不詳 三二四二)

美濃の國の泳の宮の地に、美しい少女の住む里があると聞いて、月毎日毎に行き通ひたく思ふが、その通路の途中に、大木曾山や美濃の中山などいふ踏み越え難い険しい山がある。その山が邪魔さに、靡きふせと踏んでも、横にどけと衝いて見ても、もとより心ない山の、依然として聳え立つてゐる。けに我が爲に情ない山々である。この山々さへ無いならば、道も安く日毎にも通はうものを。

泳の宮は古い頃の離宮で、美濃の國にあつた。「月に日にゆかまし里を」は古義の改訓によつた。

木曾の山々を隔てて住んだ信濃人の作である。句の續けがらに變化の妙がある殊に、なびけと人はふめども云々の句に力がこもつて居て、彼の人麿の妻に別れ

て都に上る時の作なる、「妹が門見む靡け此山」の句の如きも、或はこの古歌から脱化したものとも思はれる。結末の「心なき山の」云々の句の字数が、五三五五と短かいのも、絶望的感情が句の上にあふれて居る。

みもろの神奈備山ゆ

とのぐもり雨は降り來ぬ

雨きらひ風さへ吹きぬ

「大口の」真神の原ゆ

思びつゝ歸りにし人

家に到りきや

(卷十三、作者不詳 三二六八)

借しい別をして歸つた君の上を忘ねかねて、外を見てゐると、神奈備山のあたりが眞暗くなつて、雨が降つて來た。しかも霧たつまでにしきりに降つて、風さへ吹いて來た。名をきくだに恐ろしくさびしい狼の原を経て、深き思ひに沈みつゝ歸つておいでになつた君は、無事に家につき給うた事にや、いかがと案ぜられ

ることである。

歸つて行つた男の上を案じる女の心が、けにもあはれと汲まれる。

さし焼かむ小屋の醜屋に

かき棄てむやれ薦をしきて

鞆り坼む醜の醜手を

さしかへて寝らむ君ゆる

「あかさねす」晝は終日に

「ぬばたまの」夜は終夜に

此床のひしと鳴るまで

歎きつるかも

(卷十六、作者不詳 三二七〇)

火をつけて焼いてしまひたいやうなきたない小屋の中に、すててしまひたい破れ薦を敷いて、あかがりでさけてしまふやうな女の手とさし交して、いねてをるであらう君の爲に、私は、晝は終日、夜は終夜、この床がひし／＼と鳴るまでに、こがれ歎くことである。

わが思ふ男があだし女のもとに通ふと聞いて、妬ましさに詠んだ女の作である。冒頭より「さしかへて」までは、随分思ひきつて罵つたものである。集中の戀の歌の中にも、珍らしい作である。

「うち日さつ」三宅の原ゆ

直土に足踏みぬき

夏草を腰になづみ

如何なるや人の子ゆるぞ

通はすも吾子

諾な諾な母は知らじ

うべなうべな父は知らじ

「蜷の觴」か黒き髪に

眞木綿もち交ね結び垂り

大和の黄楊の小櫛を

抑へ挿す敷妙の子は

それぞ吾が妻

(卷十三 作者不詳 三二九五)

三宅の原を、靴もはかないで、地べたにあとをつけて、しかも腰のあたりまでのびてゐる夏草の中を行き悩みつつ、どんな人の子ゆるゑに、苦しい道を通うて行くのであるか、吾子よ。

いかにも母上はお知りあるまい。父上もお知りあるまい。眞黒い髪を、木綿であざなひ結うて垂らし、大和でできる黄楊の小櫛を押へにして挿してゐる美しい娘、それこそは自分の忍びに通ふ妻である。

「通はすも吾子」までは問であり、うべなく以下はそれに對する答である。問の部分では、我が子よ、三宅の原を困難して通つて行くのは、一體誰の爲であるかといひ、答の部分では、父母の知らないのも無理ではない、實はこれこれの女が即ち私の妻なのですといふのである。

二人の人が、ある實際の場合に、歌を以て問答したことは上代の歌に最も多く

あるところであるが、萬葉の中には、特に問答と題した一聯がある。それは實際の問答ではなくて、技巧的に構想された、一種の詩型と思はれる。この歌は問答と題されてはゐるが、一人の作のやう書きつゞけられてはゐるが、實は問答である。

死

死を悼んだ哀傷の作は、萬葉では挽歌といつた。ここに集めたのは、人麿が戀人を悼んだ有名な長編の作をはじめ、長歌短歌合せて二十四首である。當時の人々が死に對する觀念をも伺ふべきである。

大君は神にしませば天雲の五百重がしたに隠りたまひぬ

(卷二、置始東人 二〇五)

たゞ人ならず神にましますわが大君は、五百重ふかき天雲のうちなる大空に、とこしへにかくれ給うた。悲しくも畏きことかなといふので、王者の死といふ壯大な感じが、讀者の胸に迫つて来る。死といふ語の用ゐてなくて、その意の現はれてゐることも注意すべきである。

山吹のたちよそひたる山清水くみにゆかめど道の知らなく

(卷二、高市皇子 一五八)

わが妹なる十市皇女は、いたましくも黄泉路に行つた。よみ路には、今も美しい御身ながらにあらうとは思ひながら、現世の身のたづねゆくことも出来ぬ。あだかも山吹の咲き亂れてゐる山間の清水を、道を知らぬ爲に汲みもえせぬ如くで

ある。

……二一〇

皇女は、天武天皇の皇女で、従兄なる弘文天皇の妃となられた。夫君と父君との不和の中に立つて苦しみ、遂に壬申の亂となつて、夫君が戦やぶれて崩御の後、父帝のもとにいましたが、父帝が齋宮をたて、神を祀らうとなさつた日、帝の御輿が皇居の門を出で給はんとした折に、突然世を去られたのである。悲劇の女主人公といふべく、悲しむべき運命の皇女であつた。

神風の伊勢の國にもあらましを何しか來けむ君もあらなくに

(卷二、大來皇女 一六三)

大津の皇子の謀叛のことあらはれて、二十四年を一期として失せ給うた後、齋王として伊勢に給うた姉君大來皇女の、上京せられて作られたのである。

靜かに神に仕へてあるべきこの身の、何しに京に上つて來て、かゝる悲しい知

らせを聴くことかと、さきに皇子が伊勢に下られた時、二人ゆけどゆき過ぎがたき秋山を」と皇女自らが詠まれたことなどを思ひ出でては、感慨に堪へぬ意をのべられたのである。(六五頁参照)

讀み來つて、哀調の切々として身に迫るをおほえる。

御立ちせし島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも

(卷二、草壁皇子舍人 一八一)

皇太子の御殿の御庭の、荒磯めいて作られた御池のほとりに來てみると、以前よく皇太子がお佇みになつた頃には、草一本はえて居なかつたのに、今は徒らに草が生ひ繁つて、そのかみの清らけさもないことよ。

持統天皇の皇太子なる草壁皇子の失せ給うた時、舍人等が悲しみ傷んでよんだ廿三首の歌は、真情流露して古今の絶唱といふべき作である、ここにはその中の

死

……二一一

四首を抄出した。皇太子の薨後、荒涼たる様にかはつていつた御苑の内の景色を詠んで、無限の哀愁のこもつた作である。

ひむがしのたぎの御門にさもらへど昨日も今日も召すこともなし

(同上 一八四)

自分は、御殿の東にあたる瀧のある方の御門に侍つてゐる。つい此間までは、殿下が庭をお歩きになる御供にとて、たえず御召があつた。けれども、あゝ昨日も御召がなかつた、今日も御召がないことである。

皇太子の薨去し給うたことをそれと言はないところに、中々に哀情が深い。詩人ならぬ詩人の自然の詩である。おのづからにかゝるすぐれた詩をものした上代の人は、その心さながらに詩であつたからである。

水傳ふ磯の浦回の岩躑躅むく咲く道をまた見なむかも

(同上 一八五)

水の傳ひ流れるお池の岸の、岩間にある躑躅が、茂り榮えて咲いてゐるこの道を、再び見ることが出来るであらうか。

浦みは岸のほとり。むく咲くは茂り咲くこと。

太子の薨去によつて、御役を御免になつた舍人が、再び此の躑躅の美しく咲く道を見ることがあらうか。これ限り見られないことかと思へば、名残が惜しまれりと、宮殿を退去するに際して感慨をのべた歌である。

あさ日てる島の御門におほほしく人音もせねばまうら悲しも

(同上 一八九)

皇太子のいました間は、御機嫌伺ひの出入のしげく賑はしかつたのに、今はいままさすなつたこの島の宮の御門にさもらつて居ても、ひつそりとして人音もせぬ

ので、まことに心の痛むをおほえることよ。

まうらのまは添辭、うらは心の中の意。おほほしくは、おほろ、おほめく、おほつかなしなど、凡てさやかでないのをいひ、心のむすほれてはつきりしない意。こゝでは、御殿の御門の物さびしい景色が、何となく暗くうつたうしいのをいうたのである。

高圓たかまの野邊の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人なしに

(卷二、笠金村歌集 二二二)

昨日までは志貴皇子の御目にもふれた高圓山の野邊の萩の花も、皇子が薨り給うた今日となつては、もはや見はやす人もなしに、咲いては散ることであらう。高圓山は奈良の近郊、春日山のつゞきである。萬葉時代の萩の名所で、そこに志貴皇子の宮があつたのであらう。

「足引の」山さへ光り咲く花の散りぬる如きわが王みかどかも

(卷三、大伴家持 四七七)

山も光るまで咲き匂うた花の、一朝の風に散つたにもたとへまほしいわが王よといふので、聖武天皇の御子なる安積皇子が、わづかに十七歳のうらわかい齡で薨せられたのを、當時内舎人うちねりであつた作者が悼んだのである。

未だうらわかい王子の身を、山も照り映えるばかりに咲き匂ふ花にたとへたのは、いかにもふさはしい。

石戸いしとわる手力たぢからもがも手弱たよわき女をんなにしあればすべの知らなく

(卷三、手持女王 四一九)

河内王を豊前鏡山に葬つた時の哀悼の作。王を葬つたおくつきの石戸を打わるほどの力もあつたらば、王をお連れ出し申さうものを、かよわい女の身の事とて、

如何してよいか、すべも知らず、たゞ打なげかるゝことよの意。

一二の句は、神代の天照大神の故事を思ひよそへて詠んだもの。

三句の字たらずは、こゝでは特によわきといふ意に協つて利いてゐる。

去年こぞ見てし秋の月夜は照らせれどあひ見し妹はいや年さかる

(卷二、柿本人麿 二一一)

去年見た秋の明月は、今年も同じやうに照らして居るが、その頃をかぎりに別れた妻は、いよく、年を隔て、遠くなつてゆくことよ。

妻が世を去つた次の年の秋に詠んだのである。相見しは、互にまのあたり見たといふ意。

悲しみの情が、秋夜をしのばせるやうに澄みとほつてゐる

「天さかる」ひなの荒野に君をおきて思ひつつあれば生けりともなし

(卷二、作者不詳 二二七)

都を去ること遠い邊地の荒野の中に、わが戀しくおもふ夫を葬つて置いて、ひとり遙かに物思ひにしづんでゐれば、此世に生きてゐるやうな心地もしない。

旅の空でむなしくなり、さびしい野中にそのまゝ葬られて歸らずなつた夫を悲しんだもの。三四句の字餘りでおして來た語の勢を、生けりともなしといふ強い句で結んであるところに、言ひしらぬ力がある。激越の情が、自らあふれ出でて、この勢をなしたのである。

世の中はむなしきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

(卷五、大伴旅人 七九三)

かくはかない現前の事實にあつて、世の中は無常なものであると知る時こそ、愈々益々世の中が悲しく思はれる。

知る時しのしは意味を強めたので、知る時こそはといふほどの意。

神龜五年六月、旅人が任地太宰府で、妻なる大伴郎女を失つた時、都の人から弔問に接して答へた歌である。切實な感情の強さが緊張し切つてゐる。

吾妹子わぎもこが見し鞆の浦のむろの木は常世とこよにあれど見し人ぞなき

(卷三、同上 四四六)

わが妻と共に九州へ下る時に見た鞆の浦なるむろの木は、永久にかはらず立つてをるが、その見た妻は、今はこの世にないことである。

太宰帥旅人卿が、任地に妻を失つて後上京した時、備後なる鞆の浦を過ぎて、かつて相たづさへて下つた時を忍んで詠んだものである。

うつせみの世は常なしと知るものを秋風さむみしぬびつるかも

(卷三、大伴家持 四六五)

家持が愛人を失つた翌月、秋風の吹くを悲しんで詠んだ歌である。

現身の此の人の世は、常なきものであると知つてはゐるものゝ、秋風が身にしみて寒いので、亡き人の事を頻りに戀しく思ひ浮べることである。

秋が来た。秋風が寒く吹くと、一層寂しい。生者必滅、人生無常の理を知らないではない。けれどもさうした理屈で思ひ消さうとしても、此の悲しみは消えるものでない。理智を越えた悲哀の感情である。

昔こそよそにも見しか吾妹子わぎもがおくつきと思へばはしき佐保山

(同上 四七四)

これまでは何の心もなく見て居たが、今はわがなつかしい人を葬つたところと思ふとなつかしきことよと、その墳墓のある佐保山を詠んだのである。

佐保は奈良の北にあつて、大伴家の住居の地であつた。佐保山は、そのすぐう

しろにある山である。

琴取れば嗟なげき先立さきだつけどだしくも琴の下樋に妻やこもれる

(卷七、作者不詳 一一二九)

妻に先立たれた人の作。

わが妻の手馴れし琴は今此處にあつて、その主はもはや、永久に見るよしもない。琴を取るにつけても、嘆きのみ先立つのは、もしかしたらば、この琴の下樋に妻が隠れてゐるのであらうか。

琴の下樋は、琴の腹のうつろなところ。

さきはひのいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が聲を聞く

(卷七、作者不詳 一四二一)

早く妻に別れた人の悲嘆である。白髪に至るまで妻の聲をきく人は、何といふ

幸福の人であらうか、自分ははやく妻に別れて、かく寂しき生活に入つてしまつた。

妹が聲を聞くといふので、その聲も聞かれなくなつてしまつたといふ咏歎の響きが覗はれる。

鈴鹿川八十瀬わたりて誰が故か夜ごえに越えむ妻もあらなくに

(卷十二 作者不詳 三一五六)

鈴鹿川のほとりで日も暮れた。此川は多くの瀬のある川である。家に待つてをる妻も無いのに、誰の爲に夜越えに越えて急ぎ歸らうぞ。歸るはりあひも無い。旅行の留守中に、家なる妻の死んだことを聞いて歸る男の詠んだと思はれる。あはれな作である。

「足引の」荒山中におくりおきてかへらふ見ればこゝろぐるしも

弟を葬つた時の作である。

寂しい荒山の中に、可憐な弟のなきがらをおいて、送葬の人々の歸つてゆくのを見ることの心苦しきよと、いふのである。墓邊を去りかねて、立ち止つてゐるの作であらう。

哀調胸を絶つ作である。後世ながら賀茂真淵が亡き父を忍んだ歌に、「繁りあふ松かけに君をおきしより風の音こそ悲しかりけれ」といふのがある。どことなく情緒が似通つてゐるのを覺える。

「安見しし」わが大君の

明け来れば問ひ給ふらし

今日もかも問ひ給はまし

夕されば見し賜ふらし

神丘かみかの山の紅葉を

明日もかも見し給はまし

その山をふりさけ見つつ

明け来ればうらさび暮らし

ひる時もなし

夕さればあやに悲しみ

荒たへの衣の袖は

(卷二、持統天皇 一五九)

持統天皇が后にいました時、夫帝なる天武天皇の崩御に際して、哀悼の情を述べ給うた作である。

天皇の御在世の頃は、或は御覽になつて心を慰め給ひ、或は近臣にどうであると問うて樂しみとし給うた神岳の山の紅葉を、今ははや世にまさすなつたものゝ、なほその折の心ならひに、今日もや問ひ給はう、明日もや御覽にならうと、ふと思つたりして、今はとこしへにさういふ時の無いことを、その山を眺めては、明けても暮れても歎き悲しむあまりに、喪服の袖の乾く時とてはない。

句法に自らの律があつて、作者が悲歎せる心裡の感情の波動が、活々と現はれ

てるる。

「天飛ぶや」輕の路は

ねもころに見まくほしけど

度々ゆかば人知りぬべみ

「大船の」思ひ頼みて

こもりのみ戀ひつつあるに

照る月の雲がくるごと

「もみぢ葉の」過ぎていにきと

「梓弓」おとに聞きて

音のみを聞きて在り得ねば

慰むる情もありやと

吾妹子が里にしあれば

やまず行かば人目を多み

「さねかづら」後もあはむと

「玉かぎる」岩垣淵の

渡る日のくれゆくが如

「沖つ藻の」なびきし妹は

「玉づさの」使のいへば

言はむすべせむすべ知らに

吾戀ふる千重の一重も

吾妹子がやまず出でみし

輕の市にわが立ちきけば

なく鳥のこゑもきこえず

一人だに似てしゆかねば

袖ぞふりつる

「玉だすき」畝火の山に

「玉ほこの」道ゆく人も

すべをなみ妹が名よびて

(卷二、柿本人麿 二〇七)

作者が、戀人の死を悼んだ「泣血哀慟」の作である。

輕の里は、わが戀人の住む里であるから、十分に見たいけれど、その道を餘り度々行かば人目につくし、さう絶間なく行かば人に知られるであらうと思つて、いづれは天下晴れて逢へる時があらうと、後を頼んで、戀しい思をいだいて獨りこがれてゐるところ、思ひもよらず使が來て、戀人は、恰も日の落ちるやうに、月の隠れるやうに、此世を去つたといふのを聞いては、何ともいひやうもなく、どうしてよいやらわからないので、たゞ人言にのみ聞いたゞけで、ぢつとしては

居られないので、せめては戀しい思の少しなりとも慰むこともあらうかと、戀人が常に出てはながめた輕の市路に立つてみると、畝火山も寂として鳥のなく音もきこえず、往來をゆく人の、一人として戀人に似てゐるものさへ通らないので、慰むべきすべも知らず、思ひ餘つて戀人の名を呼びながら、袖をふつたことよ、の意。

悲痛を極めた情熱の作で、さびしい胸をいだきつつ、輕の市のにぎはひをながめて立つてゐた人麿のおもかけも、うかび出でるやうに思はれる。

うつせみと思ひし時に

たづさひてわが二人見し

走出の堤に立てる

槻つぎの木のこちごちの枝えの

春の葉の茂きが如く

思へりし妹にはあれど

たのめりしころにはあれど

世の中をそむきし得ねば

「かぎろひの」燃ゆる荒野からぬに

「しろたへの」天領巾あまひねがくり

「鳥じもの」朝たちいまして

「入日なす」隠りにしかば

わぎもこが形見に置ける

縁子の乞ひ泣く毎に

とり與ふ物し無ければ

男じもの腋わき挟み持ち

吾妹子と二人わがねし

枕まくらつくつま屋のうちに

晝はもうらさびくらし

夜よはも息いきつき明し

嘆けどもせむすべ知らに

戀ふれども逢ふよしをなみ

「大鳥の」羽易はがひの山に

わが戀ふる妹はいますと

人のいへば岩根さくみて

なづみ來こしよけくもぞなき

うつせみと思ひし妹が

「たまかぎる」ほのかにだにも

見えぬ思へば

(同上 二二〇)

同じく人麿の作であるが、前のは忍んで通うてゐた戀人、これは共に棲んで、いとけない子もあつた妻の死を悲しんだのである。

妻がこの世にゐた時、相携へて見た、門に近い堤の上の槻の木、あちこちの枝に春の葉が茂つてゐるやうに、繁く思ひ頼んだ妻であるのに、死といふ世の中の道理には、背くことが出来ないから、陽炎の燃える荒野に、眞白い送葬の旗に覆はれて、朝、家を立ち出でて、夕べには其まゝ隠れてしまつたので、わが妻が形見に遺していつた嬰兒が、物を求めて泣く度ごとに、與へる物とてもないから、男ながらも兒を脇にかき抱いて、妻といねた部屋の内に入つて、晝は晝で寂しく暮し、夜は夜で歎き明かし、悲嘆に日を過すけれども、如何ともせん方も知らず、戀ひ焦れても逢ふことは出来ないで、羽易山にわが戀ふる妻がゐると人がいふから、岩が根を踏んで行き悩みつゝ尋ねて來たが、此世にゐると思つた妻が、ほ

のかにも見えないのでまことに味氣ないことである。

委曲を盡した句々の中に、自然の哀情が流露してゐる。門に近い堤の木を序に用ゐ、送葬のさまを叙し、無心に泣く嬰兒を擁して歎く悲しびを述べ、山のおくつきに詣づることをうたひ、すべて概念的に悲痛の情を示さないで、具體的事がらを叙してゐる爲に、印象が鮮明にゑりつけられる。前の長歌に譲らぬ傑作である。

鳥が音も聞えぬ海に、

沖つ藻を枕になして

「鯨とり」海の濱邊に

母父に愛兒にかあらむ

思ほしき言つてむやと

高山を隔てになして

蜻蛉羽の衣だにきすに

うらもなくいねたる人は

「若草の」妻かあるらむ

家問へば家をも告らむ

名を問へど名だにも告らす

「泣く見なす」言だにとはす

思へども悲しきものは

世の中にぞある

(卷十三、作者不詳 三三三六)

海邊に漂着した死人を見て、歎いた長歌である。

鳥の聲一つ聞え來ぬ海の荒磯に、高い山を隔てとし、沖の藻を枕として、薄き衣だに身にまとはずして、無心に横たはつてゐるこの溺死者よ。父母にとつては、どれほどか愛しき子であらう。愛する妻もあらんに、言傳てまほしき事あらば傳へんと、家を問へど答へをもせず、姓名を聞いても名乗りもせず、一言も發しないで、唯黙々として横たはつてをるばかりである。いろ／＼と申うて見ても、悲しきものは人生である。

あきつ羽の衣は、蜻蛉の羽のごとき薄き衣。うらもなくは、何心もなく。母父おちち

には、父母にとつては。つてむやは、傳へようかいかの意。泣く見なすは泣いてばかりゐてまだ言葉の自由でない兒の如くといふ意で、ことだにとはす、即ち、物も言はないでの枕詞として用ゐたもの。

この歌の次に、同じく溺死者を詠んだ長歌がある。それは、句々同じ所が多く、はじめと終が少し違ふのみで、同じ歌が二様に傳へられたのである。しかも、柿本人麿が、海邊で死んだ人を歌つたものに、「玉藻よし讃岐の國は」(卷二)といふ讃岐狹峯島で詠んだ、有名な長歌がある。その何れがさきに出來たものであらうか。これは考へなければならぬ事である。

思想及び想像

天皇を神と崇めた思想、先祖を尊び、名譽を重んじた思想、現世主義の思想、無常思想、老莊的思想、人倫的思想等の思想的の作をはじめ、或は幽靈を歌ひ、或は七夕や浦島の傳説をうたつた作等、短歌三十五首、旋頭歌二首、長歌四首をあつめた。當時の人々の社會觀や人生觀の少くとも反映である。

大君は神にしませば「天雲の」いかづちの上にいほりするかも

(卷三・柿本人麿 二三五)

天皇陛下は神にてましませばこそ、かくは天雲の上なる雷のかしこい名を負つた山の上に、御座を占めたまふことよまあ。

持統天皇が飛鳥の雷岳いかづちのやまといふ山にお遊びになつた時、作者がささけた作。いかづちといふ名に因んで、天雲の雷の上と詠んだのであるが、こゝに現人神あらひとがみといふ上代の人々の心持が明らかに現はれてゐる。一二句は、しばくうたはれて、「大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも」など、その一例である。「安見しし」わが大君のをす國は大和もこゝも同じとぞ思ふ

(卷六、大伴旅人 九五六)

旅人が太宰府の任に下つた時、少貳石川足人が旅情を慰めようとて、「さす竹の

大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君』といふ歌を贈つたのに答へたのである。お言葉ではあるが、天下を知ろしめすわが天皇陛下の御領土としては、帝都のある大和の國も、邊域なるこの九州も、同じこと、思ふので、自分は別に故郷を戀しいとも思はない、の意。をす國は、しろしめす國といふに同じい。

忠良なる朝廷の官吏の作として、注意される。

ふる雪の白髪しろかみまでに大君に仕へまつれば貴くもあるか

(卷十七、橘諸兄 三九二二)

天平十八年の正月に、大雪が降つた。先帝なる元明天皇の御所に伺候した諸臣に勅して、雪の歌を詠せしめられた。その詔に應じて人々が奉つた中の一つで、左大臣諸兄の作である。

この降りしいた雪のやうに、眞白に頭かなるまで、天皇陛下に仕へ奉つて、深

い御いつくしみを蒙つてをることを思へば、ゆに貴くもかたじけない思がする。

國家をおもふ白髪しろかみの老臣の面目が、躍如たるものがある。

天の原あまのふりさけ見れば大君のみ壽いぢぢは長く天足あまたらしたり

(卷二、天智皇后 一四七)

廣々とした大空をふり仰いで見れば、天は無限にして、あだかもわが天皇のみのちの長久を示してゐる。たとひ御不例にましますとも、やがて御平癒ましまして、萬代に榮え給ふべきこと、疑ふべくもない。

天足らしたりは、天に満ちわたつてゐるといふほどの意。

天智天皇の御不豫にましました時、皇后の奉られた御作であるが、これを單に大御代を壽いだ作としてみても、崇高莊重の調がみちあふれて居て、いかにも皇后の御歌にふさはしい。

いざ子どもたはわざなせそ天地の固めし國ぞやまと島根は

(卷二十、藤原仲麿 四四八七)

やよ人々よ、ゆめく心得違ひの行などをすることなかれ。この日本の國は、天神地祇の造り固め給うた國であるから、如何なることがあつても、ゆるぐ國ではないぞ、の意。天平勝寶九年にあつた橘奈良麿の謀叛のことなどを思つて詠んだのである。

いざ子どもは、人々をうながし諭す意に用ゐてある。

「やすみしし」わご大君

神ながら神さびせすと

芳野川たぎつ河内に

高殿を高知りまして

登り立ち國見をすれば

たたなづく青垣山

山神の奉る貢と

春べは花かざし持ち

秋たてば紅葉かざせり

逝き副ふ河の神も

大御食に仕へまつると

上つ瀬に鵜川をたて

下つ瀬に小網さし渡す

山川もよりて仕ふる

神の御代かも

(卷一、柿本人麿 三八)

わが天皇は現身の神であらせられるから、神としての御業をなさらうとして、吉野川の急流のほとりに立派な御殿をお造りになり、そこからをちこちを見給ふと、重なり合つてゐる鬱蒼たる山は、恰かも宮殿を圍む天然の垣のやうに見え、その山の神は、天皇に奉獻する物として、春には花を咲かせ、秋には紅葉をかざすのである。山ばかりでなく、めぐりそうて流れる川の神も、天皇の御食料を差上げる爲にと、上流下流に鵜を用ゐて魚を捕り、小網を以て魚を捕へて奉る。山も川も臣民と均しく歸依し奉つて、天皇にお仕へ申上げる、まことに御稜威の尊い

御代であることよ。

神ながらの「な」は「の」と同義の助辭。からは故にといふ意の副詞で、古い形。天皇は現身の神であらせられる故にの意。神さびせすは、神らしく振舞ひ給ふ。逝ゆき副たふの句は、古寫本によつたのである。

主意は天皇の御威光を稱へる點にある。四圍の狀況を叙するのもその爲である。春には花が咲き、秋には紅葉の山となる。それを寫すに、單に自然現象としてでなく、山の神が天皇に對する貢であるとして、花や紅葉を挿頭かぶしとすると歌ふ。川には魚が棲み、人がそれを挿へて天皇に奉るのであるが、それも川の神が天皇の御食膳の爲にと魚を奉るものとして歌つてゐる。かくて、山も川も擧つて天皇に奉仕するといつて結んである。山も川もといふことは、臣民は云ふに及ばず、山や川さへも、といふ意味を含んでゐる。山や川に神があつて、それが人間と同じ

やうに、仕へ奉るといふ思想は、單純な、しかも率直な上代人の心であり、又極めて素朴な自然の詩美が、その中に見出されるのである。

そのこ士ただやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして

(卷六、山上憶良 九七八)

憶良が病床にあつた時、先輩から病を問はれたに答へた歌。表の意は、男子と生れ來て、萬代に言ひ傳へ語り續くべき名を立てずして、徒らに世を過ぐすべしや。必ずいみじき功を立てて、名を不朽に傳へねばならぬの意で、裏には、自分は碌々たる一生を送つて、何等の名をものこさず、今や世を去らうとしてゐる。思へば大丈夫たるもの、口惜しいことであると、悲憤の情をもらしたものをのこやもは、男子にしてやの意。

奈良朝の熱血歌人の面目、躍如としてゐる。

丈夫は名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語りつぐがね

(卷十九、大伴家持 四一六五)

大丈夫たる者は、須く名を立てねばならぬ。後世の人をして、その名聲を聞き傳へ、語りつがしめんために。

がねは、俗に、やうにそのためにと豫期する意。

これは、勇士の名を振ふを慕ふ歌といふ長歌の反歌で、上記の憶良の「をのこやも空しかるべき」の歌に後から和したもの、武人が名譽を重んずる意氣を歌つたものである。

大伴の遠つ神祖のおくつきは著く標たて人の知るべく

(卷十八、家持 四〇九六)

大伴家の祖先は、天忍日命で、天孫降臨の時に、來目部を率ゐて御先導をした

功勞ある神である。それ以來大伴家は、朝廷に仕へて、武臣の棟梁であつた。この祖先の名譽をたゞへて詠んだ作。

わが大伴家の祖先は、國家の功臣であるから、その墳墓は灼然く目立つやうに、標木をたてて、萬人をして知らしめねばならぬ。これぞ子孫たる者のつとめであるぞと、名家の誇を述べたのである。

劔太刀いよよとぐべし古へゆさやけく負ひて來にし其名ぞ

(卷二十、家持 四四六七)

一族なる大伴古慈悲が、讒言によつて任を解かれた時、同族をいませめた歌である。

神代の昔から、天下に誰知らぬものもなく傳へ受けて來た名譽あるわが大伴の氏であるぞ。いよくますますく家名を磨いて、祖先を辱かしめぬやうにせよの意。

一二の句は、譬喩的の意味である。

名譽を重んじ、祖先を尊ぶわが國民思想の一面は、この作によつて著るく歌はれてゐる。

「久方の」天路は遠しなほなほに家に歸りて業をしまさに

(卷五、山上憶良 八〇一)

天に昇ることが出来たらば、思ひのまゝに振まふことが出来るであらうが、その天に昇るべき道は遠い。されば、やはりすなほに家に歸つて、自分の家業を勵んだがよい。

なほくには、素直にまた尋常にの意。なりは家業。しまさには、しまさね、しませといふに同じい。

迂遠な空想はしないがよい。しかして着實に人間の常道に精勵するに如くはな

いといふ意。これは、當時外來思想の影響をうけて、老莊の學説を喜び、人倫の常道を顧みない者があつたのを歎いて、その「惑へる情を反らしむる」爲に歌つた長歌の反歌である。

此世にし楽しくあらば來む世には虫に鳥にも吾はなりなむ

(卷三、大伴旅人 三四八)

酒を讚る歌十三首の中にはさまれて居る歌。現在だに楽しくば、來世などはどうでもよい、虫にも鳥にもならうの意で、當時の佛教の説く所などを嘲つたもの、なほこの歌のすぐ次に、「いける者つひにも死ぬるものにあれば此世なる間は楽しくをあらな」といふのがある。此世なる間は、現在にある間はの意、楽しくをのは強めた詞、あらなはあらうの意。

しるしなき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあらし

様々の事を思つても甲斐のない、いたづらな物思ひをしようよりは、し如かず、一杯の濁酒を飲むべきである。

以下三首は、上に述べた讃酒歌十三首のうちである。

中々に人とあらずは酒壺さかに成りてしがも酒にしみなむ

(同上 三四三)

なまじひに人とあらずよりも、むしろ酒壺になりたく願はれる。さては、いつも酒にしみてをるであらう。

四句は六字の句である。酒にしみなむの一句、作者のおもかけが思はれて、おもしろい。しかも此歌は、吳の鄭泉という人が死するに臨んで、我を陶家のうしろに葬れ、化して土となり幸に取られて酒壺とならば、我が心を獲るであらう

というたといふ支那の故事を思つて詠んだのである。

黙居もくぐりてさかしらするは酒飲みて酔泣よひなするに猶しかすけり

(同上 三五〇)

賢者ぶつて黙つてゐるよりは、酒を飲んで酔泣をする方がましである、の意。偽善を罵つた作。この歌に至つては諷意が明らかである。

斯くしつゝ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋は散りゆく

(卷六、大伴坂上郎女 九九五)

親族の人々と宴會を催して打興じたをりの作である。かやうにして、楽しく遊びかつ飲めかし。かの草木といへども、春は盛んに生ひしけつて、秋が來ると散つてゆく。人間もいつかは散りゆく身である。今のうちに春の草木の如く樂しまう。

郎女の兄なる旅人の讃酒歌さけうたほど有名ではないが、同じく、現世的思想を歌つた

代表的の作である。

白髪し子等も生なばかくのごと若けむ子等に言らえかねめや

(卷十六、竹取翁 三七九三)

年とつた自分を、さまざまに罵しるそなた達も、長らへて白髪の生ふる身ともならば、丁度今の自分と同じやうに、若い人達に罵られ笑はれるであらうに、さう自分の老はれたのを笑ひなさるな。

年老いた竹取の翁が、少女等の笑ひ罵るにこたへた作。

のらえかねめやは、罵られまいとするも、罵られないでゐられまいにの意。教訓を含み、無常觀も見える。注意すべき作である。

瀧の上の三船の山にゐる雲の常にあらむと我が思はなくに

(卷三、弓削皇子 二四二)

かく吉野の勝地に遊んで楽しい思をしてはゐるものゝ、もとより人間の身として、あの瀧つ瀬なして流れる川の上方なる三船山の頂に、たゆたうてをる雲が、いつ消えてしまふかわからぬやうに、いつ迄かくてあり得ようか。思へば、はかない事である。

わがもはなくには、自分は思はないにと、餘韻を残した言ひ様である。

無常觀を歌つた歌は萬葉に數多あるが、この歌は中でも趣がある。

世の中を何にたとへむ朝びらき漕ぎ去し船の跡なきごとし

(卷三、沙彌滿誓 三五二)

世の中の無常をば何にたとへたらよからう。恰も湊にとまつてをつた船が、朝船出をして、漕いで行つたあとに、何の跡も残らないやうなものである。

朝びらきは、朝に湊を船出するを云ふ。

有名な無常觀の作。この歌を拾遺集には、「世の中を何にたとへむ朝ほらけ漕ぎ行く船のあとのしら波」として載せてある。以て時代の調の好尚の相違を知るべきである。

もののふの八十やそ字治河の網代木あじろにいさよふ波の行方ゆくへ知らずも

(卷三、柿本人麿 二六四)

宇治川のほとりに立つてみると、河中に打つてある網代木にさへぎられて、ほんの暫くためらうてゐた波が、すぐに流れて行つて行方も知らずなつてしまふことよ、はかないことである。

人麿が近江國から京へ上る途中、宇治川の邊に立つて詠んだ作。調子がいかにもしつかりしてゐる。無常の感を歌つて、少しもめづしいところがない。

ものゝふの八十は、氏とかゝる序句。網代木は、川水をせいて魚をとる爲に仕

掛けた杭の列のことである。昔は、秋から冬にかけて、この網代で氷魚をとつたのである。

かくのみにありけるものを妹も吾も千年の如く頼みたりける

(卷三、大伴家持 四七〇)

かくばかりはかない命であつたのを、その死んだ當人のわが妹も、また残された自分も、恰も千年も一緒にながらへるもののやうに頼んでゐたことであつた。愛人の死を悲しんで、人生の頼みがたいのを歎いた作であるが、無常てふことを露骨に言はないところに、中々にあはれが深い。

生死いしじの二つの海を厭はしみ潮干の山をしぬびつるかも。

(卷十六、作者不詳 三八四九)

世間の無常を厭うた作。

生死の二つの苦しみに悩む海のやうなこの世が厭はしいので、あなたに見える潮干の山を慕はしく思ふことである

潮干の山は、やがて彼岸である。生死の苦しい大海から浮び出て、常樂我淨の世界に到達しようとする願ひである。

「鯨取り」海や死する山や死する 死ねこそ海は汐干て山は枯れすれ

(同上 三八五二)

海や山も、人間と同じく死ぬことがあるか。いやそんなことはないと思うてゐたが、よく考へてみると、やはり死ねばこそ、海も汐が干、山も枯れるのである。思へば無常は、單に人間のみでなく、この世に常住のものはありはせぬの意。旋頭歌である。死ねこそは、死ぬればこそその意。

高山と海こそは

山ながらかくも現しく

海ながら然も直ならめ

人は花ものぞ

「うつせみの」世人

(卷十三、作者不詳 三三三二)

高い山は、山として此やうに現然と世に在り、海は海として、直在たゞありに變らずある。それに引かへて、人は花のやうにあだなはかない物である、この世の人は。無常よりのがれられぬ人間の運命をはかなんだ作。花ものといふ詞は、十二の卷にもある。

心をし無何有むいかうの郷に置きてあらば藐姑射ひこやの山を見まく近けむ

(卷十六、作者不詳 三八五二)

自分の心を虚無の境においたならば、仙人のをるといふ藐姑射の山をも、やがてまのあたりに見る事が近いであらう。

道家の思想をうたつたので、無何有之郷、藐姑射山、ともに莊子に見えてゐる。

現身うつせみは數なき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな

(卷二十、大伴家持 四四六八)

人の命は短いものである。功名の巷にあくせくして、何の得る所があらうぞ。むしろ、山に入つて、溪流のさやかな眺めを見つゝ、佛道を修めむには。

風流の歌人であり、また武人であつた作者が、中年以後の思想の一面を伺ふべき作である。

三四の句を、人間本來の清淨なる性を觀じてといふ意に見るのも、一つの解し方である。

白珠は人に知らえず知らずともよし 知らずとも我し知れらば知らずともよし

(卷六、元興寺の僧 一〇一八)

人に知られないである白珠は、たとひ人に知られないとて、そのものの價値は

依然として大なるものである。自分でだけその眞價を知つてをれば、人はたとひ知らないでもよいといつて、自分を白珠にたとへて、一つにはその不遇を歎き、また一つには自ら慰めたのである。「しらずともよし」とくりかへした強い調子に、強い自信もこもつてゐる。

元興寺は、佛法はじめて興るといふ意で、古く創設された大寺である。この旋頭歌は、いかなる僧の作か、作者の人がらも忍ばれる佳作である。

憶良おくららは今はまからむ子泣くらむその彼の母も吾わがを待つらむぞ

(卷三、山上憶良 三三七)

自分は今は御いとましよう。家に残した子供も泣いてゐよう。そのあの子供の母(吾が妻)も自分の歸るのを待つてゐようから。

宴會の席を歸る時に、歌つたのである。萬葉歌人中の異彩であつた歌人憶良の

面目が、躍如としてゐる。

憶良らのらは調の爲に副へた助詞で、複数ではない。まからむ、泣くらむ、ま
つらむぞ、と「む」の反覆も、頗る語調がよい。

瓜食めば子ども思ほゆ

栗食めばましてしぬばゆ

いづくより來たりしものぞ

まなかひにもとな懸りて

安寝しなさぬ

(卷五・山上憶良 八〇二)

愛すべき子どもよ、瓜や栗を食べるにつけても、いよく御身たちのことが思
はれる。如何なる宿縁で、どこから來たものであるか。かやうに遠く離れてを
と、眼の前に心もとなく面影がちらついて、安らかに夜の目も寝られぬことであ
る。

憶良は、子等を思ふ歌の數々を留めてゐる。この歌もその一つであるが、短い

中に、子等に別れて遠く筑紫の旅に出てゐる人の情がよく寫されてゐる。

紅はうつろふものぞ橡の馴れにし衣に猶しかめやも

(卷十八、大伴家持 四一〇九)

紅を遊女にたとへ、つるばみの馴れにし衣を妻にたとへたのである。たとひ遊
女の花やかな一時の情も、つまりは馴れ親しんだ妻のじみではあるが眞實なのに
如くべくもない。ゆめ、はかない夢に迷ふことなかれ、といふので、屬官なる尾
張少昨といふ若者が、遊女に迷つて妻を捨てようとしたのを教誡したのである。
橡は團栗の椽を染料として染めた黒すんだ色の名で、鈍色と稱するものである。
うつろふは、色のさめる意、なれにしは、着なれてよごれた意。

難波人芦火たく屋のすしてあれど己が妻こそ常めづらしき

(卷十一、作者不詳 二六五二)

難波の浦人どもが、平生苦火をたきこがす爲に、その小屋は打煤うちすすけて古びてゐる。それにもたとへつべく、自分の妻は、年もとつたし、きたなくすゝけてはゐるが、やはり馴れ親しんだ自分としては、何時みても變らずめづらしく思はれる。浮いた戀の心とはかはつて、まじめな感情を詠んだ、素朴な歌である。常は、つねとよむ説と、とことよむ説とがある。いづれにしても意は同じい。

死にも生いも同じ心こころと結びてし友ともや違ちがはむ吾われも依よりなむ

(卷十六、作者不詳、三七九七)

竹取翁の歌(二四八頁参照)に答へた、九人の處女達の歌の中の一首である。友情を歌つた作としてここに挙げる。

死も生も共にしようと思つた我が友達が、理の當然な翁の言葉に同意した上は、自分一人河で異を樹てよう。自分も翁の説に従はう。

「死も生も同じ心」といふ詞は、當時普通に使用されてゐたので、正倉院文書のうちには數箇所ある。一例を挙げれば、天平勝寶四年六月七日高橋乙磨と三千代黒磨が申蜀直請事の解の終に、「右二人生死同心而八月收進上謹解」とある。萬葉集によつて、この句が歌の中にまで傳はつてゐることの知られるのは、おもしろいと思ふ。

奈良山の兒手柏このての兩面ふたおしにかにもかくにも佞人ねいじんの輩とも

(卷十六、消奈行文 三八三六)

奈良山の兒手柏のやうに、表裏兩面で、どちらにしても、ねぢけた、佞人の輩であることよ。

三句までは、かにもかくにもを言ひ出す爲の序。

作者は博士消奈行文で、この人に就いては、續日本紀に次の様な記事がある。

養老五年正月戊申朔甲戌、詔曰、文人武士國家所_レ重、醫卜方術古今斯崇、明經第一博士正七位上背奈公行文、賜_二纒十五疋、絲十五絢、布三十端、鐵二十口_一。また懷風藻にも、從五位下大學助背奈王行文、年六十二と見えてゐる。彼は當時の學者であつたのである。何かの事があつて、佞人等に憤懣の情を發し、この歌となつたもの、時代の隔たれるにかかはらず、正義感の強い人には悪は耐へられず、また反對に佞人といふものは何時の世にもはびこつてゐることが分つて面白い。

このて柏は、植物學的にいふと、松杉科の側柏屬に數へられる常緑の灌木で、六七尺から一丈ぐらゐる、小型鱗狀の葉を持ち、花は單性で、雌雄同様に生じ、球をなして春開き、後小球果を結ぶ。今の植物學では以上の如く説いてゐる。しかるに、古い書物には、かういふ風に出てをる。この木は平安朝の中期頃になつて、どんなものとも知る人がなかつたに、藤原範永が大和守になつて、奈良坂の邊を

通ると、花の一杯咲いた木を見て、國舍人の從者が、このて柏が咲いてゐると聲をあけたので、範永は驚いて、どの木かと問うた。從者は、これは、おほとちと申す木ですが、この國ではこの手柏と申しますと答へた。範永は年來の疑問が解けて、いたく喜んだ。しかして、葉が稚子の手に似てゐる爲、その名があるのであるといふ事が、萬葉の注釋書として最古のものである萬葉集抄（宮内省圖書寮本）に載つてゐる。この範永の見たところは、前に掲げたのとは別のものである。とにかく昔の歌人たちが、萬葉の歌に解決を得られないで、如何に熱心に考へてゐたかといふことは、かの源順の左右手（まぎ）の話とともに、感銘のある挿話として書き添へておく。

人魂（たま）のさ青（あ）なる君がただひとりあへりし雨夜（あまよ）は久しくおもほゆ

（卷十六、作者不詳 三八八九）

人魂のさ青なる君は、青白い幽霊の君といふ意。雨さへ降るさびしい夜道をゆくと、恐ろしくも幽霊が出たので、家に歸つて後も、ひたすらにその雨夜の物おそろしさが、忘られる折もなく、久しくおもはれてならぬ、といふのである。

幽霊を詠んだ歌は、古來あまり例がない。殊に、人魂のさ青なる君といふ言ひ様が面白い。

「玉かぎる」ほのかに見えて別れなばもとなや戀ひむ逢ふ時までは

(卷八、山上憶良 一五二六)

ほんのちよつと相見たのみで、十分に語りかはしもせず別れるならば、來年の秋になつて再び逢ふ時までは、たゞ徒らに戀しい思ひをして過すことであらう、思へば堪へがたいことである。

もとなは、心もとなといふ「もとな」の意に同じい。

七夕の歌で、七月七日の夕べ、天の川を隔てて住む牽牛織女の二星が、年に唯一夜あふといふうつくしい天上の戀を想像して詠んだのであるが、普通の戀の歌としても趣が深い。

秋風の吹きただよはす白雲はたなばたつめの天つ領巾かも

(卷十、作者不詳 二〇四一)

秋風に吹きただよはされて大空を行く彼の白雲は、今宵天の川に楽しいめぐりあひをするといふ棚機女が、頂の飾にかけてゐる領巾のゆれてゐるのではあるまいかと、白雲を領巾に見たてて、天上の戀を想像したのである。

機ものの躡木持ち行きて天の川うち橋わたす君が來む爲

(同上、二〇六二)

機はたの踏み板ふみいたを持つて行つて、天の川に假の橋を渡すことである。君が来るのを迎へる爲に。

はたものは機織の具。ふみ木は機を織るとき足で踏む板をいふ。うち橋は移り橋で、とりはづしの出来るやうに假にかけた橋。

織女の心になつて詠んだのであるが、天上の戀を實際化したところにおもしろみがある。

足玉も手玉たまたまもゆらに織る機はたを君が御衣みせしに縫ひあへむかも

(同上 二〇六五)

足玉、手玉は、太古の婦人が手足に纏つた玉の飾りである。機をおる毎に、その玉が互に觸れあつてゆらくと音を立てるのがめでられたので、手玉もゆらに機を織るといふのは、成句になつてゐた。さて、しかく手玉足玉の音たて、や

がて來たまふべき夫の君の御衣にと急ぎ織る機である。いかで御間にあふやう縫ひあけたいものである、の意。

彥星を待ちうけるたなばたつめの心を詠んだもの。

天の川水かけ草の秋風に靡かふ見れば時きたるらし

(卷十柿本人麿歌集 二〇一三)

織女の心になつて詠んだので、天の川の水隈に生ふる草の、秋風に吹かれて打靡くの見れば、かねて一年ごし待ちに待つた時は來たらしい。

水かけぐさは、水隈に生ふる草。

七夕の歌は、もとより想像の作であるが、實景になぞらへて詠んだところが、この歌の新しみである。

玉島のこの川上に家はあれど君を耻やしみあらはさずありき

(卷五、某女 八五四)

大伴旅人が、松浦なる玉島川のほとりにさまようて、魚釣る少女の美しい姿を見た。まさしく神仙の女にあふ思ひして、歌を以て問うたに、少女の答へた作である。玉島川のこの川上に自分の住む家はありますが、言問ひ給ふ御身のはづかしさに、それとも明しかねることであるといふので、可憐の趣が深い。殊に美しい語調が、人の心を魅するものがある。この前後數首の贈答が、全部空想の所産であるか、或は事實を神仙談化したものであるか、いづれと解するにしても、この歌のおもしろみはかはらない。

春の日の霞める時に

釣船のとをらふ見れば

水の江の浦島の子が

墨の江の岸に出で居て

古への事ぞおもほゆる

鯉釣り鯛つりほこり

七日まで家にも来ずて

海神わたづみの神かみの女なに

相とぶらひこと成りしかば

わたつみの神の宮の

たづさはり二人入りゐて

永き世とこよにありけるものを吾妹わが妹子こに告りて語らく父母ことに言のも宣らひ

言ひければ妹がいへらく

今の如逢はむとならば

そこらくに堅めし言を

海界うみを過ぎて漕ぎ行くに

たまさかにい漕ぎむかひ

かき結び常世とこよにいたり内の重への微妙よなる宮殿とのに

老いもせず死にもせずして

世しの中の愚人のろひの暫しばらくは家に歸りて明日あしたの如吾わがは來きなむと常世とこよ邊べに又かへり來てこの篋くしひらくなゆめと

墨の江に歸りきたりて

家見れど家も見かねて
 あやしとそこに思はく
 垣もなく家うせめやも
 もとの如家はあらむと
 白雲の箱より出でて
 立走り叫び袖ふり
 たちまちに情消うせぬ
 黒かりし髪も白けぬ
 後つびに命死にける
 家どころ見ゆ

里見れど里も見かねて
 家の出でて三年の間に
 この筥を開きて見ては
 玉くしけ少し開くに
 常世邊にたなびきぬれば
 こいまろび足すりしつゝ
 若かりし肌もしわみぬ
 後々は息さへ絶えて
 水の江の浦島の子が

(卷九、作者不詳 一七四〇)

春の日のうらくと霞んでゐる時に、墨の江の岸に出てるて、波にゆられてた

ゆたふ釣舟を見ると、遠い昔のことが忍ばれる。

水の江の浦島の子が、鯉や鯛をつり興じて、七日までも吾家に歸らず、海の堺を
 ずん／＼漕いでゆくほどに、偶然にも海神の女に漕ぎあつた。互に話しあつて約
 束が出来たので、相つれだつて常世の國へいつて、海神の宮の奥ふかい美しい殿
 にむつまじく携さはり住んで、不老不死の樂しみを味つてゐた。かくていつまで
 も變るべくもなかつたのに、世間第一の愚か人といふべき浦島が、ある日その妻
 なる女に告げて云ふには、暫くの間、故郷の家に歸つて、父母と語らつて來て、
 すぐに明日にも歸つてこようと言つた。すると妻なる女は、この常世の國に再び
 歸つて來て、今のやうに自分と暮らさうとならば、ゆめ／＼此箱を開き給ふなど
 いつて、一つの箱をわたした。

さて浦島は、墨の江に歸つて來て、自分の家をたづねても見えず、自分の村を

たづねても見えない。自分が家を出てわづかに三年ほどであるのに、こんなに垣もなく、家も失せる筈はない。いかにもあやしいことである。この箱を開けて見たらば、もとのやうに家も見えるであらうと、かたく約束した言葉をも忘れて、箱を少し開けると、家が現出するどころか、怪しい白雲が箱から立ちのほつて、常世の國の方へとたなびいたので、これはしまつたと、夢中になつて、斬けまはり、聲をあけ袖をふり、ころけまはり、足ずりして嘆いてをるうちに、忽ちに感じも鈍くなり、今の今まで若かつた肌には皺がより、黒かつた髪も急に白くなつた。かくて後々には、息さへも絶えて終に死んでしまつた。

この昔語りと言ひ傳へられてゐる浦島の子が住んだといふ家の跡が見える。

浦島物語は、我が國の上古に於ける、最も美しい傳説である。しかしてこの傳説は、丹後風土記、また浦島子傳などにも載つてゐるが、それらのものは、五色の

龜を得たとか、蓬萊宮の美觀を述べるとか、支那的に潤色されてゐる點が多く、この萬葉の歌の方が、最も簡素で、また最も上古的のもので、わが國の古傳説の一つなる浦島傳説の、比較的原型を傳へて居る。この點に於いて、古傳説をうたつた古叙事詩として、大に注意するに足りる。

この歌は、詞も平明、調子も流暢で、何等の飾もなく綾もないが、讀んでゆくうちに、不知不識、上古の人の空想の世界に、ひきいれられてゆく感じがする。小泉八雲氏の傳を讀むと、氏はいたく、この歌の「春の日の霞める時に墨の江の岸に出でゐて」といふ美しい調子を喜んで、時々口ずさんでをられたといふことである。

諧

謔

素朴無邪氣で、或は野趣に富み、或は奇抜の妙あり、又は自ら嘲つたものは、萬葉集の諧謔の作である。古今集以下に於ける俳諧歌のやうな語戯にながれたものとは全く選を異にする。長短凡てで十八首。

吾が岡の霏おひにいひてふらしめし雪の摧くだし其處そこに散りけむ

(卷二、藤原夫人 一〇四)

藤原鎌足の女で天武天皇の夫人なる藤原夫人が、その故郷なる大原の里に赴いた留守中に、都には大雪が降つた。天皇はたはむれに夫人のもとに、『吾が里に大雪降り大原の古ふるりにし里に降らまくは後』といふ御歌をお贈りになつた。歌の意は、都では珍らしく大雪が降つたのに、そなたが見ぬ事が氣の毒である。そなたの往つてをる大原のやうな物ふりた寂しい里に降るのは、ずつと後の事であらうといふ諧謔の御歌である。そこで夫人も亦たはむれにお答へしたのであつた。

都に降りましたのを、大雪ふれりなどとえらさうに仰しやつてお遣しになりましたのは、まことにをかしう御座います。それは、私がをりまする大原のうしろの岡に、雨や雪を掌る龍神が住んで居ますから、それにいひつけて降らせました

雪の碎片かけらの、ほんのほつちりが、都に散つていつたのでございませう。

贈られた御歌よりも、より以上にいうた所にをかしみがある。くだけしの「くだけ」は名詞に用ゐたもの、しは助辭で「が」の意。

相おもはぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづくごとし

(卷四、笠女郎 六〇八)

當時寺々には、禮拜の目的物たる佛像とともに、慳貪けんどんの惡報を示すが爲に、餓鬼の像が置いてあつた。佛菩薩を拜してこそ、滅罪生善の益もあらうに、餓鬼のもとに行き、しかもそのしりへに禮拜しても、何の甲斐があらう。片戀の人を思ふのは、丁度これに似た愚かさで、いくら此方から思つても何の甲斐もないと、自分で自分を嘲ける意を述べて、さうとは思へど、我ながらどうする事も出来ない戀しさを言ひあらはしたものである。反省もあり、諷刺もあり、嘲笑もあり、

かつ熱情もある。古來の歌に多く類のない作である。

戀草をちから車に七車つみて戀ふらく吾が心から

(卷四、廣河女王 六九四)

おもいものをのせる車七輛に、戀草を一ぱいに積みおせたほどの戀しさである。自分の心づからで、の意。自ら嘲つたのである。

七車は、卷四に、「吾戀は千引の石を七ばかり」云々、卷五に「松浦川七瀬の淀はよどむとも」云々と同じく、數の多いのをいふ詞。こふらくは、戀ふる事よの意。

戀は今あらじと我は思へるをいづくの戀ぞつかみかかれる

(同上 六九五)

もはや戀などは、自分には残つてゐないと思つたのを、何處の戀がつかみか、

つて来たか、又かく人の戀しさに責められることぞと、これも自ら嘲つたのである。

戀を、鬼のやうなものに、たとへなしたところが面白い。次に擧げる「家にありし櫃に鑲さし」云々と同じい。前にかかけた『ますらをや片戀せむと歎けども醜のますらを猶戀ひにけり』は、特に大丈夫を標榜した歌ではあるが、思想は似通うてゐる。

家にありし櫃に鑲さし藏めてし戀の奴のつかみかかりて

(卷十六、穂積親王 三八一六)

家にあつた櫃に錠をおろして、確としまつておいた戀といふ奴が、櫃から出て、掴みかかつて我を苦しめることである。

戀といふものを擬人したのであつて、機智に富んだ作である。「つかみかかり

て」と言ひ残したところも面白い。

黒木とり草も刈りつゝ仕へめど勤しき奴と譽めむともあらず

(卷四、大伴家持 七八〇)

聖武天皇が山城の久邇に都をお遷しになつた頃、家持が紀女郎に贈つた歌五首の中の一つで、「板ぶきの黒木の屋根は山近し明日の日とりて持ち参りこむ」といふ歌の次にある。紀女郎が、家を新築するので忙しい、手傳ひに来て下されというたに答へたもの。「わけ」は、奴の自稱にも、對稱にも用ゐる語で、ここは對稱である。

前の歌は、新京は鹿背山が近いから、屋根の材料にする黒木は、明日とつて参りませうというたに續いて、しかし、黒木をとつたり壁代に入用な草も刈つて、あなたの爲ならば十分はたらきは致しませうが、忠實なよくはたらく奴だと、譽

めても下さいますまい。平常から無情いあなたですから、と戯れいつたのである。奴といふ詞について一種階級的の意義を有してをつた當時に、奴の對稱を用ゐたところに滑稽味がある。

勝間田の池は我知る蓮なし然いふ君が鬚なき如し

(卷十六、某女 三八三五)

新田部親王が、奈良の郊外なる勝間田の池の蓮の美しく咲いてゐるのを見て歸られてから、近侍の婦人に、今日勝間田の池に遊んだが、水はみちたたへ、蓮の花はてりかがやいて、面白さ限なかつたと言はれたに、婦人が戯れに歌つたのである。

いえく、勝間田の池はわたくしはよく案内を知つて居ますが、あそこには、蓮は一本も御座いませぬ。たとへば、さう仰有るあなた様にお鬚のないやうで御座

います。けだし親王は非常に鬚の濃い方であつたので、凡て裏を言つてたはむれたのである。或は伴はれなかつたのを怨じた意味もこもつてゐるとも解される。

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼たばりて其子うまはむ

(卷十六、池田朝臣 三八四〇)

寺々に置いてあるやせほちの女餓鬼が申しますには、あのやせほちの大神の男餓鬼を夫に賜はつて、その子を生みたうございます。

大神奥守は非常に瘦せた人であつた。池田朝臣は、彼と親しい友達なので、かう言つて嘲笑したのである。表現が滑稽で奇抜である。然るに奥守は之に報いて、
「佛造る眞朱足らずば水たまる池田の朝臣が鼻の上を穿れ」と詠んだ。それは佛像を作る爲に彩色の朱が足らずば、池田の朝臣の鼻の上を掘れ、そこに朱が澤山あるからの意。瘦男の奥守を嘲つた池田の朝臣は、偶然にも赤鼻であつたので

かういつて嘲りかへしたのである。贈答の一聯、いづれ劣らぬ皮肉な好諧謔であるが、一方からみれば、當時の寺院に餓鬼の像の置かれてあつたこと、佛像の彫刻の盛んであつた時代相などが、これらの歌に看得ることを注意すべきである。

法師等が鬚ひげのそり杭馬こまつなぎいたくな引きそ法師は哭なかむ

(卷十六、作者不詳 二八四六)

友人の法師の鬚ひげがこはいので、剃つてもく、じきに亂杭らんぐつのやうにはえるのを嘲つて、戯れに詠んだのである。

法師が鬚ひげをそつた跡をみると、生えかゝつて來た有様が、杭こまの立つてゐるやうである。あの杭へ馬をつないで、ひどく引張つたりするな。そんなことをすると法師は泣くであらうから。

すべて大袈婆おぼに言つたところに無邪氣むじゃぎがあつて、何等の毒氣どくきがない。この第

五句も、次の歌の第五句も、敷田年治の説によつたのである。

檀越だんごつや然しかも言いひそ里長さとらが課役かやくはたらば汝いましも哭なかむ

(同上 三八四七)

前の歌に報いた法師の作である。

施主の君よ、其やうにえらい口をおき、なさるな。里長等が租税をきびしく取立てたならば、しかいふ御身等も、苦しさに泣くであらう。その時になつて、さういふ租税を催促される恐のない我々世外の身を羨み給ふなよ、の意。

親しい友達同志の戯れた罵りあひである。檀越は佛語で、僧から俗人を指して言つた詞、施主の意で、今も檀家とか檀中とかいうて居る。後の旦那といふ詞はこれから轉化したのである。

石磨いしに我われもの申まをす夏瘦なせによしといふものぞ鰻うなぎとり食くせ

瘦す瘦すも生けらばあらむを將や將鰻をとると河に流るな

(卷十六、大伴家持 三八五三・四)

吉田石麿が非常に瘦せてゐるので、こころやすい家持が、戯れて贈つた二首の連作である。

石麿さんに敢へて申しあける。平常から瘦せてをられる御身が、況して此夏にはたまりますまい。夏瘦には鰻が功能があるといひますから、君も鰻を漁つて食べたらばよからうと思ふ。

いや、しかし、さうはいふものの、如何に瘦せながらも、生きてをれば結構である。もし又、御身のやうに瘦せて力がなく軽い體で、鰻をとらうとて、その爲に河に流されてしまつてはいかぬ。

二首意味が續いてゐる。はたやはたは、もしか亦の意。前に述べた大神の奥守

のやうに、吉田石麿は、歌で家持を嘲りかへすことが出来なかつたのは氣の毒であつた。

この頃の吾が戀力記し集め功に申さば五位の冠

このごろの吾が戀力たばらずは京兆に出でて訴へむ

(卷十六、作者不詳 三八五八・九)

これも二首の連作である。

此頃の、自分が戀人を戀したふ心の力を思ふと、吾ながらその強さに驚く。これを記し集めて、功勞として政府へ申立てたならば、定めて勸賞にあづかつて、五位の位を頂くことは疑ひないと思はれる。

しかし、もし又、此頃のこの戀の力に對して、なほその賞を賜はらないとならば、京職のお役所へまかり出てお訴へ申さうぞ。

戀力は戀の奴などとともに、この時代の面白い言葉である。みさとは京の内をいふ。みさとづかさは、今の詞でいへば、東京府廳といふたぐひである。二首ともに軽い自嘲のこころである。

さしなべに湯涌かせ子どもいちひ津の檜橋より來む狐に浴むさむ

(卷十六、長意吉麿 三八二四)

ある時多くの人々が集つて酒を飲んでゐた。その時に夜が更けて狐の聲がしたので、人々が意吉麿に、この器具や狐の聲、また河の橋などを詠み入れて歌を作れと言つたので、すぐさま詠み出した歌。すなはち澤山の物を詠み入れて、即時に詠んだ歌として傳はつてゐる。

人々よ、鍋に湯をお涌かしなさい。櫛津の檜橋から來るあの狐に浴びせてやりませうよと、いふほどの意。歌としては別段の事は無いが、種々の物を詠み入れ

て卽座に作つたといふ所に、意吉麿の才人であることが知られる。第一句のさし鍋は、正倉院文書にも「佐志奈閉一口」とある。

醬酢ひしほすに蒜ひるつきかてて鯛なねがふ我なにな見せそ水葱みずの羹あつち物

(同上、三八二九)

これは、同じく意吉麿が、酢、醬、蒜、鯛、水葱の五つを詠み込んだ作である。酢醬油にんにくを搗き交ぜたあへ物に、それに鯛をほしいと思つてゐる。さうしたものの好きな自分に、そんな水葱の汁などは見たくもないことである。食料品を詠じて、當時の生活の様子を伺ふ事が出来るといふ點から見て、面白い作である。

吾妹子わきもこが額ぬかに生なひたる雙六ふたごの殊負ことひの牛の鞍うまの上かみの瘡かさ

(卷十六、安倍子祖父 三八三八)

舍人親王が、近侍の者たちに、意味がなくておもしろい歌を詠んだらば、賞をやらうと仰つた時、子祖父こひぢぢが詠んで、その賞を賜はつたといふ二首の歌の一つである。

意味は無いのである。しかし、わが思ふ人の額といつて、それに生へたといひ、當時はやつた雙六を持ち出し、その小さなものから、特にことひの牛といふ頭の大きな牛に移り、鞍の下ならぬ上に瘡かさが出来たといふ、朴訥なうちに才氣がまじり、子供らしいことをいつて笑つてゐる所が面白い。

はし立の熊來くまきのやらに

新羅しんら斧おとし入れわし

懸けて懸けて勿泣なかしそね

浮き出づるやと見むわし

(卷十六、能登國歌 三八七八)

能登の海邊なる熊來の水底の泥深い處に、大事な朝鮮式の斧を落してしまつた。

それを心にかけてお泣きやるな。どうかして浮び出ることがあらうかと、見てるよう。

ある愚人が斧を海底におとした。沈んだ鐵が水に浮ぶ理の無いのを知らずにるので、さる人がこの歌を詠んで喻たとしたのである、といふ傳へが添うてゐる。「わし」は調子を整へるための囃子詞である。

上代文明特殊の事象

帝都及び舊都

帝都は上代に於いては文明の殆どすべてであつた。また遷都は、上代に於ける頻繁な現象であつた。上代の人々の文明の花たる帝都に對する考や、荒廢した舊都に對する感情等は、ここに集めた十七首の長短歌にも伺ひ知られよう。

大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田るを都となしつ

(卷十九、大伴御行 四二六〇)

壬申の亂が平定して、再び皇威のかがやかしさを見た時、新たなる御代をたたへた作。御行は時の大將軍で、家持の祖父なる安麿の兄にあたる人である。天皇陛下は、ゆに現つ神にましますが故に、赤駒が腹ばうてゐた田であつたところをも、忽ちに變じて、家並のつゞく盛んな帝都となし給うた、の意。「田る」は、田といふに同じである。

昨日まで田であつたところが、今日は都となつたのを見て、今更ながら天皇の御威徳に感じたのである。

「玉だすき」畝火の山の

樞原のひじりの御代の

生れましし神のことごと

「樗」の木のことごと

天の下知ろしめししを

「青丹アヲよし」奈良山を越え

「天離アマリる」鄙にはあれど

さざ波の大津の宮に

すめろぎの神のみことの

大殿はここといへども

霞立つ春日の霧れる

見れば悲しも

「空にみつ」大和をおきて

いか様に思ほしめせか

「石橋いははしの」近江の國の

天の下しろしめしけむ

大宮はここと聞けども

春草の茂く生ひたる

「百しきの」大宮どころ

(卷一、楠本人麿 二九)

畝火山の麓橿原の宮に天下をお治め遊ばされた神武天皇の御代以來、歴代の天皇が、相繼いで大和に都をおいて、天下を治め給うたに、如何なる深い思召があつたのか、その大和をあとにして、奈良山を越えて、舊來の帝都の地に遠い近江

の大津の宮に天下を統治し給うた天智天皇の、その大宮は此處である、その大殿は此處であると聞くが、それとも見えないのは、生ひ繁つた春の草に隠れて見えないのか、霞が深くこめてきら／＼する春日の日ざしの爲に見えないのか、あはれ、さしも盛んであつた近江朝廷の大宮を、かゝる有様に見奉ることの悲しさよ。

近江舊都の廢墟に立つて詠んだ、有名の作である。

自分がかつてある畫家から、人麿を畫題にして見たいが、といふ相談をうけた。これ迄の畫に現はれた人麿は、六七十歳の老人で、筆を持つて案じて居るところいかにも月並の宗匠のやうであるのみならず、人麿は、素朴な上代人の性格のうち、烈しい熱情を有した詩人である。かつ人麿は想像されて居るよりも遙かに年が若い。その歿したのは四十餘であらうと思はれる。かの白髮の像は、平安朝の人が人麿を畫がきたいと念じて、その夢にあらはれた姿を寫したものとひ傳

へて、服装も上代のさまでなく、白帆をあしらつてあるのも、ほのほのと明石の浦といふ人麿の作でない歌(今昔物語には小野篁が隠岐へ流される時の作とある)に誤られたもので、まことに平凡な畫様である。然らばいかやうに畫がかばよからうといふに、この近江舊都の懐古の長歌によつたらばよからうと思ふ。背後には長柄から比叡にかけて山々が立並び、青草の繁つた中に、皇居の礎石が残つて居る荒廢のあとに立つて、近く志賀の湖のさびしい水の色を見ながら、無量の感慨をたたへて居る様を畫がいたならばよからう、と答へたことであつた。序でにここに書き添へておく。

さざなみの志賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちかねつ

此歌も次のも、共に前の長歌の反歌で、同じく人麿の作。(同上 三〇)
その昔、大津が近江朝廷の都となつて榮えた頃、大宮人が常に船を寄せて遊ん

だ辛崎は依然として存するが、しかし大津の宮も荒廢に歸した今となつては、最早大宮人の遊びの船などは待ち設くべくもないことよ。

辛崎を人に擬して詠んだのである。「辛崎さきくあれど」、同音の反覆に自ら韻がある。さきくは、幸くで、かはらずにの意。

大河の流れるやうな大きい調子が、いかにも舊都を悼む懐古の情にふさはしい。さざなみの志賀の大わだよどむとも昔の人に又もあはめやも

(同上 三一)

靜によどんでゐる志賀の湖の水よ、あはれいかに待ちよどんでゐても、昔近江朝當時の人々の影を再びうつし得ようや、否、帝都と榮えた昔は、もはやとこしへに過ぎ去つて歸らない。

「大わだよどむとも」は、湖水の灣曲したあたりの靜かな水を人に擬して、汝が

いかに静かにして待つてゐてもと言ひ掛けたので、湖水の水に托して、懐古の情を詠んだのである。

古人の説に、人麿の父兄は大友皇子の麾下にあつて討死をしたので、昔の人は行く水の跡なく、又逢ひがたしと、父兄の悲しみをいひあらはしたものと説いて居る。一説として掲げておく。

近江の海夕浪千鳥汝が鳴けば心も萎しぬに古へおもほゆ

(卷三、人麿 二六六)

これも同じく人麿が近江舊都の懐古の作であるが、前の長短歌とは別の時の作とおほしく、別の巻に載つて居る。

志賀の湖のほとりなる舊都の跡に立つて居ると、折から夕暮の浪に亂れて、千鳥が鳴く。その聲を聞いてゐると、心も打しをれて古へのごことが様々に思れる。

夕波千鳥は、夕波に亂れ飛ぶ千鳥の意で、かういふ簡勁な實語ばかりの句法は、後世の歌には見えないところである。前に述べた豊旗雲や草深百合なども、この類である。千鳥と呼びかけて、汝が鳴けばと承けたところ、一分のすきもない引きしまつた言ひ様で、景あり、情あり、限なき感慨があふれてゐる。しぬには、憂へしなへての意。

さざ波の國つ御神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも

(卷一、高市古人 三三)

帝都となつて榮えたこの大津の地が、近江の國を支配し給ふ國の神の御心の荒らびによつて、遂にかの壬申の大亂ともなり、かくは今の荒涼たる有様となつたのを眼のあたり見ると、悲しみの情に堪へぬことよ。

うらさびての「うら」は、表の反對で心のうちの意。「さびて」は、荒びてである。

大亂のあつたのを、國の神の御心の荒れ給うたのと見たのである。

壬申亂を去ること遠くない當時の歌人の實境に於ける作で、感慨が痛切である。これに比較して、後世かの平忠度が、「さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」と詠んだのは、昔ながらに長柄をいひかけて、言葉を弄んだのみの題詠の作である。

かく故に見じといふものをさざ波の古き都を見せつゝもとな

(卷三 高市黒人 三〇五)

舊都を見れば、かやうに悲しからうと知つた故に、見まいというたものを、しひて誘つて、大津の古い都を、よしなくも見せてくれたことよ。

旅行の途次に、舊都へと人に誘はれたのを、一旦は拒んだが、しひて誘はれて行つて見た時に作つた趣である。「かく故にみじといふものを」の句の引きしまつた

調子がいかに痛切である。五句は、もとなく見せつつの意で、「もとな」は、よしなくの義。

采女うねめの袖ふきかへす飛鳥あそが風みやこを遠みいたづらに吹く

(卷一、志貴皇子 五一)

この頃まで帝都として榮えた飛鳥の里も、天皇が藤原の宮に御代しろしめすやうになつた今は、すでに寂しい故京となつて、そのかみ宮廷の佳人等の袖を吹きかへした飛鳥の里の風も、今は吹き靡かす美しい袖もなくて、ただ徒らに吹くのみである。

初句は、うねめのと四字の句。あすか風は、佐保風、伊香保風などと同じく、古語の一種の用法。

これも、遷都がしばく行はれた上古の世相を忍ぶべき作。作者は天智天皇の皇

子、光仁天皇の御父である。

三諸の神名備山に

「つがの木のしいやつぎつぎに

ありつつも止まず通はむ

山高み川とほじろし

秋の夜は川しさやけし

夕霧にかはづはさわぐ

古へ思へば

五百枝さし繁しじに生ひたる

「玉葛かづら」絶ゆることなく

明日香の古き都は

春の日は山し見がほし

朝雲に鶴たづは亂れ

見るごとに音ねのみし泣かゆ

(卷三、山部赤人 三二四)

三諸の神名備山に、多くの枝をさし交して、生ひ茂つてゐる樛の木の名のやうに、つぎ／＼に絶える事なく、いつまでも生きてゐて通つて来て見たいと思ふ飛鳥の古都は、山が高く、川の流はめだつてみえる。春の日には山の景色が美しく、

秋の夜には川瀬の音がさやかである。朝の雲には鶴が飛びみだれ、夕べの霧には河鹿が鳴き頻る。来て見る毎に、昔の事が偲ばれて、泣かすには居られない。

三諸の神名備山は即ち神岳であつて、飛鳥清神原の舊都のほとりに在る。川とほじろしは川の流が大きくめだつ意。山し見がほしは山が美しいので常に見てゐたいの意。かはづは河鹿のこと、蛙ではない。

後半の叙景は實に佳い。一讀、鮮かな感銘を受けずには居られない。人麿の舊都を偲ぶ歌と比較してみると、彼は主觀的抒情を重んじて、自然の景物を之が爲に驅使してゐる。然るに赤人は、自然の景物を寧ろ主にして、之によつて湧き起る自己の心情を述べてゐる。此の點が兩者の差異の著しいところで、兩作家の著明な特色を示すのである。此の歌は最よく赤人のさうした特色をあらはしてゐる。彼の傑作の一である。

荒野らに里はあれども大君のしきます時は都となりぬ

(卷六、笠金村 九二九)

荒野らであつて寂しい里であつた味經あじかの原が、一度わが天皇の行幸いでまして知ろしめす時は、面目一變して、美しい都宮となり、繁華に富み榮えることである、の意。さきに述べた大伴御行の歌の類歌である。

聖武天皇の神龜二年冬十月、難波に行幸のをりの作。

遷都のしばらく、行はれた古代に於いて、昨日の荒村が、今日の帝都となるといふ變化は、いかばかりか時人の感情を刺戟したのであらう。

「あをによし」奈良の都は咲く花のにはふがごとく今さかりなり

(卷三、小野老 三二八)

奈良朝を説くごとに、よく引用される有名な作である。天平の盛時を、咲く花

の匂ふといふ一句にたとへたのは、單純でしかも適切である。あまたの技巧を弄したのには、はるかに勝る印象を與へてゐる。

「にはふ」は、ここでは薰るの意味でなく、色の美しいのをいふ。これが匂ふの原義である。あをによしといふ枕詞は、綠青あをにの出る奈良の義に自分は解してゐるが、語義はさておいて、ここにはまことにふさはしく用ゐられて居る。

東ひんがしの市のうる木こたの木垂るまで逢はず久しきうべ戀ひにけり

(卷三、門部王 三一〇)

市は東西にあつて、そこには菓樹が植ゑてある。東の市に植ゑた木の枝がたれるやうになるまで、久しくあはないので、戀ひしく思ふのも、我ながらことわりである。

あはず久しきは、あはないのが久しきにの意。簡勁な句法が、萬葉的である。

しかして、當時東西に市場があり、市に街路樹の植ゑてあつたことを證據だてる歌の一首である。

世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば

(卷六、作者不詳 一〇四五)

天平十三年に、都が山城の恭仁にうつされて「咲く花のほふが如く」と盛りを歌はれた奈良の都が、荒れ果てて行くのを悲しんだ時人の作である。

佛の教に、世の無常といふことを説くのを常には聞いて居たが、あのやうに盛んであつた奈良の帝都が、かく衰へてかはりゆくを見ては、今しもまのあたりに、その盛者必滅の理をまざくと思ひ知ることであるの意。

上代の單純な人の心に、世相の轉變の著しく與へる感動が、痛切に伺はれる。

立ち易り古きみやことなりぬれば道の芝草長く生ひにけり

(卷六、田邊福麿歌集、一〇四八)

榮えてゐた都が變つて、今は舊都となつてしまつたから、道のほとりなる芝草が、長くのびてゐることよ

都であつた頃は、多くの官人が通つた道であるけれども、今は草が長くのびてゐる。榮枯の轉變を、實景について簡明にあらはしてゐる。前の歌と同じく、奈良の都の荒れたのを悲しんだのである。

現つ神吾が大君の

國はしも多くあれども

山並の宜しき國と

山城の鹿背山の際に

高しらす布當の宮は

天の下八洲のうちに

里はしもさはにあれども

川次の立ち會ふ里と

宮柱太敷きたてて

川近み瀬の音ぞ清き

山近み鳥が音響む

さを鹿は妻呼び響め

巖には花咲き撓り

いと貴と大宮どころ

君の随きこし給ひて

定めけらしも

秋されば山もどろに

春されば岡邊も繁に

あなおもしろ布當の原

うべしこそ吾が大君は

「さす竹の」大宮ここと

(同上 一〇五〇)

舊京奈良の廢類を悲しんだ歌の次に、新らしい久邇の京の形勝の地であり、山水の美、春秋の景に富んだのをたたへた此長歌がある。

世に現しくまします神なる吾大君の、しろしめす大八洲の國の中に、國も多く里も多くあるが、山々の連りあひて宜き國ぞ、川々の流れあひてめでたき郷ぞと、この山城の鹿背山のほとりなる布當の地に、新京を御造營になつた。こゝは川近き

故に瀬の音清く、山近き故に鳥の聲も響き聞ゆ。秋は鹿の聲山をとどろかし、春は花の枝岡邊の巖に咲たわんでゐる、あはれおもしろく貴とき皇居よ。うべことわりなるかな、大君は神隨に聞し召して、此地に大宮所を定め給うたること。

一首のうつくしい調子が、いかにも新京の山水のうつくしさに協つてゐる。『あなおもしろ布當の原、いと貴と大宮どころ』の句の如き、朗々として打誦さまほしき快感を與へる。

藤原氏と橘氏の勢力争ひに起因して、奈良から急に布當の原なる久邇の新京に遷都があつたが、そもまた間もなく難波に遷都になつた。經營未だ全く成らざる久邇の新京の、早くも舊都となつたのを歎いて、『三香の原久邇の都は荒れにけり大宮人のうつろひぬれば』『さく花の色は變らす百しきの大宮人ぞたちかはりぬる』などの歌がある。

汐ひれば蘆邊にさわぐあし鶴の妻よぶ聲は宮もとどろに
濱清み浦うるはしみ神代より千船の泊つる大わだの濱

(同上 一〇六四・七)

難波の新京と、その附近をたたへて歌つたのである。

初めのは、汐の干たる芦原におりて、妻をよぶ鶴の聲が、宮の内まで聞える海のほとりの皇居をたたへたもの。

次のは、難波の宮より程遠からぬ神戸附近の地の、上代より千船の出入る船つきであることをたたへたもの。

しかも、この難波の宮も假の遷都であつて、更に近江の信樂の宮にお遷りになつたが、そこは山間の不便な地であつた上に、天災地妖相次いだので、官人等の希望のまに／＼、平城に還幸あつて、奈良は再び帝都となつたのであつた。

遣外使節及び節度使

三韓や唐土への使節は、上代文明に於ける最も注意すべき事項である。攝津の海邊から船出して、遠い外國にと、危険な航海に上る使節の心、又そを送る人々の心、それらを歌つた作は、まさしく別に集めなざるべきであらう。更に朝廷から四道に遣された節度使に關する作をも添へて、凡て長短十五首を收めた。

いざ子ども早くやまとへ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ

(卷一・山上憶良 六三)

文武天皇の大寶元年、遣唐使粟田真人の屬官として、憶良は唐土に赴いた。これはその歸期の近づいた折の作である。

吾等が母國を立つて、この唐土の地へ來てもはや年月を経た。さあ人々よ、早くわが日本へ歸らうではないか。出帆の時、わが船を見送つた御津の濱への松も今かくくと我等の歸るのを待つてゐるであらう。

御津の濱は攝津の港で、今の大阪の附近。そのかみ渡航の船の出入のところである。濱松といふ詞に、故郷の人々の待つてをる意がおのづから含まれてをり、松、待ちと音調もつづいて居る。

約五十年後、安倍仲麿が唐土で詠んだ、かの『三笠の山に出でし月かも』の歌

と共に、双璧と稱すべき作である。

大伴のみつの松原かきはきてわれ立ち待たむはや歸りませ

(卷五、山上憶良、八九五)

聖武天皇の天平五年三月(憶良の入唐より三十三年後)、多治比廣成の遣唐大使として出で立つを送つた作。

船の出入の津なる御津の松原を奇麗に掃き清めて、御迎へしようほどに、一刻も早く歸り來給への意。

好去好來歌といふ有名な長歌の反歌である。

旅人のやどりせむ野に霜ふらば吾子はぐくめ天の鶴群

(卷九、遣唐使人母 一七九二)

前の歌と同時に、遣唐使の屬官某の母が、出立つ吾子に贈つた作。

唐土の遠い不便な旅に行く一行らが宿らむ野邊に、霜の降ることもあらば、大空を飛びゆく鶴の群よ、下りて來て、吾がいとし子を羽に覆うてやつてくれ、かく残つて居て心づかひしてゐる自分をあはれと思ふならば、の意。

上古、鶴は多く住んでゐて、群をして飛んで居たのである。鶴のうつくしい翼にもよそへられて、美しい親心の現はれた作である。

大船に妹乗るものにあらませばはぐくみ持ちて行かましものを

(卷十五、遣新羅使人、三五七九)

天平八年六月、遣新羅使人の出立つ折、一行の一人が妻に別を惜しんで詠んだ贈答の一である。

朝廷の命をおびて遠くゆくこの大船に、お前を乗せて行つてよいものならば、鳥の雛を母の羽につゝむやうに、十分可愛がつて連れて行かうものを、さうも出

来ないから、この切ない別をしなければならぬのが悲しいといふので『武庫の浦の入江の洲鳥はぐくもる君をはなれて戀に死ぬべし』といふ妻の歌に答へたのである。

「はぐくみもちて」の一句に、鍾愛の情が十分に現はれてゐる。

君がゆく海への宿に霧たたば吾が立ち歎く息と知りませ

(同上、遣新羅使人妻 三五八〇)

海上遠く朝鮮にゆき給ふ君が、ここかしこの海邊に宿り給ふ時など、霧の深く立ちこめるのを見給はば、そは自分があなたのことを思つて、そちらをむいて嘆いてゐる嘆の息吹と知り給へかし。

やさしい妻のおもひが、言外にあふれて居る歌である。

「たくぶすま」新羅へいます君が目を今日か明日かと齋ひて待たむ

(同上 三五八七)

遠く新羅へと行き給ふ御身の、無事に歸つて來給ふ日はいつのことであらう。その遠い日を、今から毎日毎日、今日か明日かと神に祈つて待つことであらう。思つても堪へがたい今日の別である。といふので、夫が『わが故に思ひな瘦せよ秋風の吹かむその月あはむものゆる』と詠んだのに答へたのである。いますは往きますの略。

汐まつとありける船を知らずして悔しく妹を別れ來にけり

(同上、遣新羅使人 三五九四)

かく難波の津に汐待をして、徒らに日數を経、なほ出立せずにあることとは知らなかつたので、十分名残をも惜しまずに急ぎに急いで、戀しい妻のもとを別れて來たことである。残念なことをした。かうと知つたらば、もつとゆつくりして居

たであらうものを。

萬人をして實にもと同感せしめる歌である。言ひ表はし方が、また自然の妙を得てゐる。

山川の清き川瀬に遊べども奈良の都は忘れかねつも

(同上、三六一八)

安藝國長門の島に船がかりしての作。

船旅の風の都合で進みがおそく、今日はかく山川の清い河瀬におりたちなどして様々に遊んでゐても、故郷の奈良の都のことは中々に忘れがたい。始めて見る美しい景も、到底自分の情をなぐさめることは出来ぬ。

同じ一行の一人が、瀬戸内海での作に「海原を八十島がくり來ぬれども奈良の都は忘れかねつも」といふのがある。これは、多くの島々に漕ぎ隠れて來ても、

の意である。

新羅^{しんら}へか家にか歸るゆきの島ゆかむたどきも思ひかねつも

(同上、六鱈、三六九六)

遣新羅使人等が壹岐島へ着いた時に、一行中の雪宅滿が病を得て歿した。それを悼んだ作の一つである。

空しく途中に歿した宅滿の心中は、如何であらう。新羅へも行きたからうし、家へも歸りたからうし、その亡き魂はいつこに行くであらうかと、思ひ分ちかねることである。

ゆきの島は、壹岐の島で、その所の名にかけて、ゆかむとつづけたのである。たどきはたづきに同じく、たより、よすがなどの意。一二句をむかひあはせ、更に、ゆきの島ゆかむと、句をあやなしたものの「ゆかむたどき」までは、宅滿の靈

を思ひやつて詠んだのである。

大船に眞梶しじぬきこの吾子をから國へやるいはへ神たち

(卷十九、藤原太后 四二四〇)

天平勝寶三年、聖武天皇の後なる光明皇后が、春日の神を祭り給うて、御甥に當る入唐大使藤原清河の行を送り給うた御歌。

大船にのせて、このいとしきものを唐土の大使にとやるのである。藤原氏の祖先なる春日の御神よ、ねがはくは旅路の平安を守らせ給へ、の意。

まかぢしじぬきは、左右の權を幾度も幾度も繁く貫き、船を漕ぎ動かす有様を言つたので、大船にまかぢしじぬきは、殆ど成句となつて、しばく用ゐられて居る。しじは、繁くに同じい。

から國に行き足らはして歸りこむ丈夫武雄に御酒奉る

(卷十九、多治比鷹主 四二六二)

藤原清河の副使大伴胡麿が入唐の餞別の宴のをりに、鷹主が壽ほいで詠んだ歌。はるくくと唐土へ赴いて、よく使命を果しをへ、無事に歸り來ますべきますらをの君に、盃を奉るの意。

莊重にして、しかも輕快なる調子は、朝命を帯びて、遠く萬里の旅に出で立つ名譽の使臣を送るにふさはしい作。聲をあけて打ち誦すべき歌である。

青海原かぜ波なびき往くさ來さつむことなく船は早けむ

(卷二十、大伴家持 四五一四)

天平寶字二年二月、遣渤海大使小野田守を餞した時の作。渤海は高麗の國名である。

青海原に吹く風も立つ浪も、貴い天皇の使節の行き給ふことゆゑ、おだやかに

なびきふして、往返とも何のさはりも無く、船足の早く歸り來ますことならむ、の意。

ゆくさくさは、往途も歸途も、つゝむことなくは、障る事なくである。初句の字あまりと、結句の早けむのとちめに、力がこもつて居、殊に風波なびきの句に、皇威の盛んなるをたたへた意氣がこもつて居る。一首の高調、まことに遣外使節送別の歌たるにふさはしい。

をす國の遠の朝廷に

汝等し如是まかりなば

平らけく我は遊ばむ

手抱きて我はいまさむ

天皇朕うづの御手もち

かき撫でぞねぎ給ふ

うち撫でぞねぎ給ふ

還りこん日相飲まむ酒ぞ

この豊御酒は

(卷六、聖武天皇 九七三)

天平四年八月、東海山陽山陰西海の諸道に節度使を遣はし給ふ時、酒を賜はつての御製。

卿等をかく諸國に遣はす事ゆる、朕は安心して月花に遊びもし、手を拱いてもをらう。天皇にます朕の大御手もて、かくは撫でつつ勞苦をねぎらひ給ふ。この酒は、無事任を果して卿等が歸りこむ日に、再び共に飲まう大御酒なるぞ。

をす國の遠のみかどは、天皇の治め給ふ皇國の遠い政府、即ち、地方の官廳をさしたので、太宰府鎮守府のたぐひを言つたもの、つまりそれらの官府の支配下にある地方といふ意である。うづの御手のうづは、高く厳しき意の美稱。かき撫でうちなでの、かき、うちは、共に添へた詞。

天平盛時の天皇の御作として、想も調も雄大な趣のある御製である。

ますらをの行くとふ道ぞおほろかに思ひて行くな大丈夫の輩

(同上 九七四)

前の長歌の反歌である。

この度、汝等諸臣に、節度使の重任を托して、諸道へと遣はす、苟くも大丈夫が、國家の爲に赴く重大な使命である。汝等よく自重して、おろそかに思つてゆくことなかれ、の意。

莊重な語調と相まつて、帝王の御製にふさはしいおごそかな作である。

千萬のいくさなりとも言舉ことあひせずとりて來ぬべき男をとことぞ思ふ

(卷六、高橋蟲麿 九七二)

前の御製と同時に、藤原宇合が西海道節度使となつて出發する時、作者が贈つた長歌の反歌で、たとひ千萬の賊軍ありといへども、ぐすく言はさずに、勅命のまに／＼討ち平らけて歸り來べき、たのもしい大丈夫であると自分は信ずる、

の意。

節度使の重任を帯びてゆくを送るに、ふさはしい作である。この時宇合の作つた詩が、懷風藻と云うて、吾が國の最も古い詩集に載つて居る。ついでに載せておく。

往歲東山役 今年西海行 行人一生裏 幾度倦邊兵

東歌及び防人

東國の農民等の作、また同じ東國人が防人に徴されて、九州に赴く折の作等、短歌三十二首、長歌一首を集めた。所謂東歌の中には、京から任に下つた人などが、特に東語を用ゐて詠んだものも交つてゐるが、ここには主として、東國人の作と思はれるものを採つた。野趣横溢して、たしかに集中の一異彩をなしてゐる。

筑波ねの彼面此面に守部居る母は守れども魂ぞ逢ひにける

(卷十四、作者不詳 三三九三)

筑波山の彼方此方に、獵をする爲に番人をおくのと同じやうに、母が厳しく守つてはゐるけれども、魂と魂とは相逢ふことである。

男の歌と考へられぬこともないが、母はとあるのを以て思ふに、女の歌である。守部は狩獵の時、獸を待ち伏せする爲におく見張である。

常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何どか絶えせむ

(同上 三三九七)

常陸なる浪逆の海の美しい藻ならばこそ、引けば切れるであらうが、自分は、どうして中の絶えることがあらうか。

結句の表現が強い。

浪逆は常陸國鹿島郡で、鹿島香取の間の内海の汎名である。萬葉集註釋の著者仙覺は、常陸に生れた人であつたので、この海のことを委しく注し、銚子口の方から浪が逆しまにのほるので、なさかと名づけたのである、と述べてゐる。

足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やます通はむ

(同上、三三八七)

足音をたてず、そつと歩んで行く駒もあらば、それに乗つて眞間の繼橋を渡つて、戀しい人のもとに絶えず通はうものを、さういふ馬もないから、人目が憚かられて思ふやうにも通はれず、様々に心を苦めることであるの意。

眞間は、今の下總鴻の臺の麓の邊、繼橋は、一枚板をわたした小川などの橋のたぐひでは無くて、幾枚もの板をつづけた比較的長い橋をいふので、その繼目が葛などで結んであるので、殊に歩む音が轟くのである。

「にほどのりの葛飾早稻を新嘗すとも其かなしきを外にたてめやも

(同上 三三八六)

葛飾の田の早稻を神に奉つて新嘗を祭る時は、忌み慎しんで、門をも閉ぢて、外から來る人は入れない習慣ではあるが、たとひその祭をする時でも、いとしいあなたを外に立たしておくやうなことはどうしてしよう。もしあなたが來給はば、新嘗の時とても必ず内へ入れますから、の意、女の眞心を示した作。

當時は、農家でもかく、家毎に新嘗の祭をしたのである。かなしきは、愛しくおもふ意、ここでは、愛人とやうに用ゐてある。

多摩川にさらす手づくりさらさら何ぞ此兒のここだかなしき

(同上 三三七三)

たま川は、諸國に同名の川があるが、ここは武藏の多摩郡を流れる川である。

手づくりは手織の布のこと。玉川の水にさらす手づくりの布と、一二の句は序で、さらすをうけて、更に更に、何故ぞこの子のかくは可憐に戀しく思はるゝことぞと、餘りの戀しさを自らあやしんだのである。

さらくには、いよくますますく。ここは、非常に。かなしきは、前の歌と同じく、いとしむ意であるが、ここは、上のつづきで、いとしく思はれるのであることか、の意。

武藏野の草はもろむきかかも君がまにまに吾はよりにしを

(同上 三三七七)

武藏野に生ふる草は、あなたこなたにむくものなるを、自分はともかくにも、何事にもせよ、御身の心のまゝにと身を委ねて、あなたにたよつたのであるのを、何故に、うとくお成りになつたのであらうと恨んだ意。

もろむきは、諸向で、おのがむきくゝに靡くさまである。

鎌倉のみこしの崎の岩くえの君が悔ゆべき心はもたじ

(同上 三三六五)

あなたが後悔なさる様な、あだな心は持たない。かたく信じて頼り給へと、戀心の眞面目なのを誓つたのである。

岩くえのは、岩が波にえぐられて出来た腐蝕部をいふ。

三句までは悔ゆを云ひ出す爲に、見たまゝの景を述べたのである。

この四五句のいひざまは他にもあつて、卷三に、『妹も吾も清みの河の川岸の妹が悔ゆべき心は持たじ』。卷十に、『雨ふればたぎつ山川岩に觸り君が權かむ心は持たじ』卷十一に、『さねぬ夜は千夜もありとも我背子が思ひ悔ゆべき心は持たじ』などある。戀心をうたふ時、おのづから相通ふものがあるとも見られるが、

一方から考へると、これらの歌のどれかが原歌で、民謡として歌ひ傳へられて、それが段々に變化していつたものと思はれる。(八四頁参照)

信濃路は今の新墾道はらみちかりばねに足ふましなむ沓くつはけ我背

(同上 三三九九)

信濃の街道は、近頃開墾した新道であるから、木や竹などの切株も多いことであらう。跣では怪我をなさるといけませぬ。必ず沓をはいてお出になるやうにと、思ふ男の出立に際して、女心のやさしくもあやぶんで贈つた歌。粗野な中にはそれがこもつてゐる。四句の訓は、古寫本によつたのである。

信濃路は、木曾路のこと。かりばねは、刈つた木や竹の根の義。

信濃なるちくまの川のさざれ石も君し踏みてば玉とひろはむ

(同上、三四〇〇)

千曲川の河原にある小石は、今までは何とも思つて居なかつたが、その小石も、いとしい君の足に踏まれたものならば、玉ともめでて拾はうの意。

千曲川は筑摩川とも書く。信濃川の上流である。

下野安蘇しもつひねあその川原よ石踏ます空ゆと來ぬよ汝なが心のれ

(同上 三四二五)

汝を思ひかねたればこそ、安蘇の川原を石をも踏まず、天翔りに翔つて、飛んで來たのである。そなたは吾を如何に思ふか、早くその心を告げよかし。

空ゆと來ぬよは、空から來たといふので」とと「よ」は感嘆詞である。

「たもとほり往箕ゆきみの里に妹を置きて心空なり土は踏めども」(卷十一)「我妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり土は踏めども」(卷十二)などいふ歌があるが、これは又、心空なりどころではなく、空を飛んで來たといふのである。はやく神代記

の歌に「天はせ使」の句があり、神武紀に天の磐船の事は見えてをるが、千年の後の今日、人が空行く事を、誰が想像してゐたらう。それにしても、戀の心は空を走せて、上代の歌の上に、かかる句の残つてゐるのはまことに面白い。

沼二つ通は鳥が巢吾が心二行くなもと勿よ思はりそね

(同上 三五二六)

あちらの沼こちらの沼と、二つの沼に巢をもつて通ふ水鳥のやうに、自分を、二心を持つてゐるものと思ふこと勿れ。自分の通つてくるのは、ただそなたの所ばかりであるを。

かよはは、通ふ。二ゆくなもは二方にゆくならむ。なよもはりそねは、思ふ勿れで、いづれも東語である。

間遠くの野にも逢はなむころなく里のみ中に逢へるせなかも

(同上 三四六三)

人里離れた遠くの野邊などで逢つたらば話も出来ようものを、この人目のしけい里のまん中で逢ふとは、世間をはばかりる女心をも知らないで、心ない君かなと歎いたのである。

み中のみは助辭。せなは、吾背の東語。

稻つけばかがる吾が手を今宵もか殿のわく子がとりて嘆かむ

(同上 三四五九)

稻をついて、荒い手わざをするので、轆りがきれて、我ながら醜くなつたこの手をば、殿の若様が、いとしがつて歎かれることであらうと思へば、羞しいながらまた嬉しい。田舎娘が、その眞情をさながらにうたつたもの。

殿のわく子は、地方官などの若い息子をさしたのである。この一句で、作者の

身分も境遇も、またこの歌の環境も活躍してゐる。

鴉とふ大をそ鳥のまさでにも來まさぬ君をころくとぞ鳴く

(同上、三五二一)

鴉といふ大あわて者の鳥めが、ほんとうに來もしない君を、兒等來、兒等來といつては鳴く。じれつたい思をしてゐる人の心も知らないで、憎らしい鳥であると、男を待ちあぐんた女の作である。

をそは、周章の意。まさでは、眞實に、ころくは兒等來で、兒等は、戀人を指して親しんで稱した語。鴉の鳴聲に模したのである。

さを鹿の臥すや草むら見えすとも兒ろがかなとよ行かくし吉しも

(同上、三五三〇)

草村に隠れ臥してゐる鹿の見えぬやうに、たとひ姿を見ることは出來すとも、

戀しい人の住んでゐる家の門前を通るのは、それだけでも何となくなつかしくて、心嬉しいものである。

ころは親しみいふ詞。かなとは釘でさしかためた大門の戸の義。えしもは吉しもの東語、よい事よまあ、の意。

かなと田をあら搔き土干裂み日が照れば雨を待とのす君をと待とも

(同上、三五六一)

新たにすきかへした門田の干われるまで日が照るので、雨の降るのを待つやうに、ひたすら君を待つことである。

内容は、君を待つといふだけで、頗る單純であるから、歌の興味は、主として譬喩の部分にある。

かなと田は門田。雨を待とのすは、雨を待つ如く。

今日よりはかへり見なくて大君の醜の御楯と出で立つ我は

(卷二十、今奉部與曾布 四三七三)

以下は防人及びその家族の作で、上代の社會相の一面を傳へて居る。防人とは、異國の寇を防ぐ爲に、關東の強い若者を三年交替に九州へ遣して、崎々を守らしめるをいふので、天智天皇の三年に筑紫に水城を築き(六六頁参照)また西海道の邊要の地に防人を配置せられたのである。さきもりの語義は、崎守で、野守山守などのたぐひである。しかして、彼等が遠い旅の別を惜しんだ作、途上の作等は、卷十四及卷二十に、その東語のままにしるされて、素朴なひびきを千古に傳へてゐる。

今日からは何等かへりみることもなく、勇ましい心を以て、天皇陛下の御ために、微々たるながら守護の兵の一人となつて、東國から、はるかに九州へ出かけ

るのである。

しこは、醜のますらを、しこほと、ぎすなどと同じく、卑めた語、御楯は敵の矢をふせぐ意から、大君を守る兵の意。しこのみ楯は、いやしい御楯と、自らを卑下して言つたのである。

出立つ我はの句に、極めて力強い意氣が自ら現はれてゐる。

大君のみこと畏こみ磯に觸りうの原わたる父母をおきて

(卷二十、丈部人麿 四三二八)

天皇陛下の勅命のかしこさに、なつかしい父母をもあとにのこして、海原を漕ぎ渡り、遠い筑紫の任に赴くことよ。うのはらは、海原の東語。

東國の邊地のいやしい民にも、この忠節の心があつたことを汲み知るべき作である。

防人さきもりに行くは誰たが夫せと問ふ人を見るが羨としさ物思ものひもせず

(卷二十、作者不詳 四四二五)

吾が夫が今年防人に徴されて、はるく九州へ出立するのを見て、あれはどこ
の家の主人かと、道行き人などが、他人事ひとごととして、何の心配も無けに問ふ様子を見
て居ると、いかにも羨しく思はれることよ。

防人に徴されて行く者の妻の作である。防人が出立する時の村里などの場面も
躍如として、あはれが深い。

わが妻も繪にかきとらむ暇いとまもが旅ゆく我われは見つゝ忍しのばむ

(卷二十、物部古磨 四三二七)

遠くのこしてゆくわが妻を、繪にうつしとる暇いとまだにあれかし、旅の道すがら、
せめて畫姿なりとも、常に見て戀こひ忍しのばうものを。

上代の肖像畫が今日完全に傳はつて居るのは、御物になつてゐる聖徳太子の像
のみである。しかして、上代の文献に肖像畫のことが見えて居るのは、この歌一
首のみである。當時關東の野人が、妻の肖像を畫にかくといふことは、文化史の
上から見て、極めて意義あることで、かういふ點から見ても、萬葉集は實に貴重
なものである。

あかごまを山野やまのにはかし取かにて多摩のよこ山かしのかやらむ

(卷二十、宇遲部黒女 四四一七)

句中の東語を普通の語に直してみると、「赤駒を山野に放ち取兼ねて多摩の横山
徒歩かちよりかやらむ」となる。多摩の横山は、多摩川の上なる横山村の小山脈。赤駒
を野に放つておいたところが、いよく夫の出立の日となつて、あやにく捕へか
ねて、夫の旅行の間にあはず、あの多摩の横山を、夫をして徒歩で越え行かしめ

ることかまあといふので、事實のままを詠んだのであるが、その中に、野人の妻のやさしい心もちがあふれて居る。

庭中のあすはの神に木柴さし吾は齋はむ歸り來までに

(卷二十、若麻績部諸人四三五〇)

庭の中に祭れる阿須波の神の前に柴をさして、自分が防人をつとめをへて、歸りくる迄の無事を齋ひ祈つておかう、の意。

上代の民家には、竈の神、井の神などと共に、阿須波の神を祭つたのである。阿須波の神は地を掌る神、即ち人の足踏み立てる地を守り給ふ神ゆゑ、旅行の無事を祈つたのである。かの松が枝や草を結んで、無事に歸らむことを祝つたものと共に、旅行に關する古代の信仰のさまも知られる歌である。

なほ此歌以外にも、神を祭る歌は數首あるが、佛に關する歌の一首もないこと

は注意すべきである。

今年ゆく新防人が麻ごろも肩のまよひは誰かとり見む

(卷七、作者不詳 一二六五)

今年徵募にあつてはるばると九州へゆかれる新しい防人の、麻衣の肩先が破れたりしたらば、誰が繕ふことであらうぞ。

まよひは、紕とかいて、糸がよれて衣の敗れんとするのを云ふ。

防人にゆく男の上を悲しんで、婦人の詠んだ作である。或は防人の母の作とも見なされるが、それよりも、情人の作と見る方が、誰かとり見むの誰かといふ詞に、軽いねたみ心もまじるやうに聞きなされて、よいと思ふ。

から衣すそにとりつき泣く子らをおきてぞ來ぬや母なしにして

(卷二十、他田大島、四四〇二)

妻は失せて鰥の身の、妻の忘れ形見の子を育てて居たに、はからずも防人に徴されて遠くへ出かける事になつた。出かける時に、子供らが自分の着物の裾に取つて泣いて居たが、それをふりすてて來は來たものの、子供等の上がいとしく思はれるの意。あはれの深い歌である。

關東男兒は古來勇武を以て聞えてゐた。天平勝寶七年に、大伴家持が防人を詠じた長歌にも、「きこしをす四方の國には、人多に満ちてはあれど、鶏が鳴くあづまをのこは、出で向ひかへりみせずて、いさみたる猛き軍卒と」と賞で、景雲三年の詔にも、「東人は常に曰く、額には矢は立つとも、背には矢は立てじと云ひて、君を一つ心もちて護るものぞ」云々とたたへ給うた。さる勇武なる東男兒にも、かかる涙の歌はあつたのである。

蘆垣の隈所に立ちて吾妹子が袖もしほゝに泣きし思はゆ

(卷二十、刑部千國 四三五七)

芦垣のまがり角のところ立つて、半ば身を隠しながら別れを惜んで、衣の袖もしほたれるばかり泣いてをつた妻の姿が忘れかねて、遠く別れて來ても、なほ眼に残つて見えるやうである。

一二の句、人目を厭ひつつ別を惜んだ女のあはれな姿が、いきくと詠まれて居る。

しほゝはしほゝの意。そもはゆはおもほゆの東語。

松のけの並みたる見ればいはびとの我を見送ると立たりしどころ

(卷二十、物部眞島 四三七五)

松のけは松の木、いはびとは家人、たゞりしどころは、立ちてありし如しといふ意、いづれも東語である。

松の木が旅の道の邊に立ち並んでゐるのを見ると、恰も出立の際、家人等が自分を見送るとして立ち並んだ有様の如くに思ひなされて、今更に別離の悲しさをおほえる、の意。

道のほとりに立ちつづく松並木、もしくは汐風に傾きながら立つてゐる海邊の磯馴松などを、見送りの家の人に比へたのは、自然に出た譬喩で、しかもいひしらぬあはれがこもつて居る。

百限の道は來にしを又更に八十島すぎて別れか行かむ

(卷二十、刑部三野 四三四九)

幾度かまがりくして長い陸路を來たのに、又これからは船に乗つて、幾十の島を過ぎて、遠く別れてゆくことであらう。

東海道の陸路を歩いて來て、愈々難波から船に乗る時の作である。旅路の長く

苦しいのを歎いて、旅情のいよく切なるを述べたのである。百限といひ、八十島といひ、又更にといひ、別れか行かむというところなど、痛切な情が胸をさすやうにおほえる。

常陸さし行かむ雁もが吾が戀を記してつけて妹に知らせむ

(卷二十、物部道足 四三六六)

故郷の常陸の國を指して飛んでゆく雁もあれかし。我戀ひしたふこの心を書き記した手紙をつけてやつて、残して來た妻に、いかで知らせたいものである。

記してつけてと、てを重ねたところにも、深い情がこもつて居る。

旅とへど眞旅になりぬ家の妹が著せし衣に垢づきにかり

(卷二十、占部虫麿 四三八八)

「とへど」は、と日へどの省略。「かり」は、けりの東語。

旅といふ中にも、わが旅行は眞の旅になつた。家の妻が出立に際して著せてくれた衣が、此やうに垢ついたことよ。

一二句、かりそめの旅にはあらで、月日ながき旅となりたりの意。

「むらたまの「櫃」に釘さし固めとし妹が心は動搖くなめかも

(卷二十、刑部志加磨 四三九〇)

初二句は、「固めとし」と言はむが爲の序。

戸の櫃に釘をさした如く、心配すなと云ひ固めておいた妻の心は、旅に遠く来たわが事を思つて、さぞや動搖して、不安に思ひ煩つてゐることであらうかの意。「あよく」は動搖するの古語で、危くの意とする舊説は宜くない。近く世に出た氣比神宮の神樂歌にも、次の如き用例がある『道の口くま坂山の葛の葉の、や、あゆける我を、夜一人ねよとや。かみの、夜一人ねよとや。おけ』

わが家ろに行かも人も草まくら旅は苦しと告げ遣らまくも

(卷二十、大伴部節磨 四四〇六)

この旅行の苦しさを、家郷の方へ行く人もあらば、告げやらむものをの意。通信の便宜の無かつた時代の旅人の苦しみが、これにもよく現れてゐる。

み空ゆく雲にもがもな今日ゆきて妹にことどひ明日かへりこむ

(卷十四、作者不詳 三五一〇)

大空を飛んでゆく雲ともなりたい。もし雲の身ならば、今日飛んで行つて、妹と語つて、明日は歸つてこようものを。

筑紫にあつて家郷を懐つた作。單純素朴のところ、言ひ知らず面白い。前の常陸さしの歌も、わが家ろにももの歌も、また此歌も、交通の不便であつた上代の東國の状態を背景において、讀み味ふべき作である。

足柄のみ坂た廻り
荒男も立しや憚る
馬の蹄筑紫の埒に
諸は幸くと申す

願みず吾は越え行く
不破の關越えて吾は行く
留り居て吾は齋はむ
歸り來までに

(卷二十、倭文部可良麿 四三七二)

常陸の國の防人なる可良麿が、故郷の人に思ひを馳せて詠んだ歌である。

常陸からはる／＼筑紫に赴く途中、幾廻りする険しい足柄の峠をも、願みもせず、ひたむきに越えて行き、たけき武士も立ち憚る美濃の國の不破の關をも、ためらはず我は越えて行く。今よりは、九州の埒邊に駐屯して、吾は、家なる人の無事を祈る、再び故郷に還りつく日まで、わが記憶に残る人達よ、平安にてあれかしと祈り申すのである。

た廻りのたは接頭語で、迂餘曲折してゐる場所を行くをいふ。越え行く、立しや、留りゐて、いづれも東語の訛りである。立しや憚るは立ち憚る、やは感嘆詞。

前にも述べた如く、九州の防人は東國の人を以てこれに當てたので、防人の歌には、東語を以てよまれた特殊な作が多くて、特殊な色彩を傳へてゐる。しかし、彼等は、長歌の創作が出来るほど文學的修練を積んでゐなかつたのであらう、防人の長歌は、萬葉集中唯この一首が存してゐるに過ぎない。しかし、それ丈けに、この長歌は、澄澗として清新である。技巧もなく、素野で、何處かたどくしけには見えるものの、いかにも力のこもつた作である。

この長歌は、從來殆ど顧みられなかつたやうであるが、自分は特に推奨してよい作と思ふ。東國人のこの雄々しいすぐれた長歌を以て、この抄釋の筆を擱くこととする。

釋抄袖珍萬葉集終

佐佐木信綱著述目錄中萬葉集に關する書目

藍紙本萬葉集解說	一帖	明治四十三年十二月刊
類聚古集解說	一册	大正三年三月刊
元曆校本萬葉集解說	一帖	大正八年五月刊
增訂萬葉集古寫本攷	一册	大正九年六月刊
新刊古葉略類聚鈔	六册	大正十二年二月刊 (橋本氏同校)
金澤本萬葉集解說	一帖	大正十三年五月刊
增訂萬葉集新選	一册	大正十三年十月刊
校本萬葉集	廿五册	大正十四年三月刊 (橋本氏武田氏久松氏等同校)

萬葉二百種簡明目録	一册	大正十四年五月刊
有栖川王府本元曆萬葉集解説	一帖	大正十四年十二月刊
增訂萬葉集選擇	一册	大正十五年三月刊
天治本萬葉集解説	一册	大正十五年四月刊
祕府本萬葉集抄	一册	大正十五年六月刊
仙覺全集	一册	大正十五年七月刊
抄釋袖珍萬葉集	一册	大正十五年十二月刊
桂本萬葉集解説	一册	大正十五年十二月刊

昭和二年一月十五日印刷
昭和二年一月十五日發行

不許複製



袖珍萬葉集 與付
正價壹圓四拾錢

著者 佐佐木信綱

發行所 株式會社博文館
東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

右代表者 大橋勇吉
取締役社長 大橋勇吉
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 島 潔

發行所 株式會社 博文館
東京市日本橋區本石町
振替東京二四〇番

(印刷社會式株刷印同典)

和歌百話

文學博士 佐佐木信綱著

現代歌壇の泰斗佐佐木博士が「歌は心の糧なり高尚なる心の慰安なり」との見地よりして
 縦横に論断せられたるもの、或は初學の手引となり、或は和歌の講義となり、或は歌人の傳
 記逸話を傳へ、或は萬葉古今以下の歌集を解説し、或は和歌に對する常識を述べ、話題壹
 百いづれも多趣多味、一度本書を精讀し博士に接して、その博大なる學識と懇篤な
 る訓話を聽くの思ひあるべし、和歌に志ある人、文藝を愛好する人の座右にまた一般家庭
 の讀物として切に江湖に薦む。

◆ 中判特製
紙數六二〇頁

正價金貳圓四拾錢
送料金八錢

校註和歌叢書

文學博士 佐佐木信綱校訂註解
 文學博士 芳賀矢一

全部七卷書目

- 1 萬葉集略解 (上)
- 2 萬葉集略解 (下)
- 3 八代集 (上)
- 4 八代集 (下)
- 5 三十六人集
- 6 近代名家歌選
- 7 和歌作法集

上下二千歳の我が文學史を貫いて、國民文學の精髓を
 收めて本書を成す、而して校訂、補正選出いづれも
 兩博士の細心嚴密なる用意になり、而も製本の麗、價
 格の廉に至つては他に匹敵を見ず、書齋に應接室に必
 ず一本を置すべきなり。

◆ 菊判總布裝函入
紙數五三〇〇餘頁

正價金參圓貳拾錢
送料各十八錢

和歌名所めぐり

文學博士 佐佐木信綱著

歌道の泰斗佐々木博士が吾國古今の名所に關する古人今人の作を汽車の沿線汽船の航路の順次に編纂して説明を加へ且臺灣・朝鮮・南洋・歐米の名所の和歌をも網羅し、所謂居ながらにして日本及各國の名所を巡り得べきもの、家庭の好讀物、また作歌の好發書なり。殊に旅行者は一部を携へて、車窓に旅館にまた舊蹟に之を讀みれば四季折々に旅行の趣味一層豊かなるべし。

◆新形洋裝美本 正價金壹圓六拾錢
紙數四三五頁 送料金六錢 ◆

日本歌學史 增訂

文學博士 佐佐木信綱著

本書は歌壇唯一の權威たる著者が帝國大學に於ける講義の稿本にして、和歌に關する學問的研究の嚆矢をなせるものにして、上は平安朝より下は明治に至る歌人歌學者の所説を叙述して精細を極む。卷末に參考書目を載せ、中世歌學道統譜・近世歌學統譜を附録とせり。曩に帝國學士院は本書に對して學界最高の名譽たる恩賜賞を授與せらる。以つて其の價值を知るべき也。

◆菊判洋裝特製美本 正價金貳圓四拾錢
紙數六五六頁 送料金十八錢 ◆

百一人首講義

文學博士 佐佐木信綱著

古今和漢の書、其類數十萬部に及ぶべしといへども、普く世に行はれ世人に知れ、洵くむ
海士柴刈る童にいたるまで口に誦んずるは此百人一首なるべし、定家郷の撰なりてより既
に千年益々廣く吟賞せられ、老幼貴賤、和歌とし言へば先づ此書をさすに至れり、故をも
つて從來註釋の書夥なからざれど、あるは煩に過ぎあるは簡に失し未だ適當の書ある事な
り、本書は此點に留意し讀み人の略傳、懇切ある講義、古人の異足を擧げ詳細もらす所な
し。一般家庭の必備書。

◆ 四六判洋裝 紙數五〇〇頁 正價金六拾五錢 送料四錢 ◆

終

